昭和十六年七月中浣起筆

養病漫筆

十二

特別
14
1919
513

38- 9299

176778

義士遺墨

昭和十二年七月中浣起筆

○吉田定八は三浦郡松村と云ふ農家より三浦相陰の父子と成る所の子一家数人悲嘆の涙を流すと雖も父兵の為め殺さるゝ、此人為家を作し的資馬を騎ることを常とするが故、賊と誤られて那命を殺れん所也、此人詩文を善くす、家の和れん自筆の詩文数枚あり、徒然の間折から出して閲覧するに二三意を感ずるものあり

其一　歌文峯が父の歌を題かんとてお茶を点る時の迷歌

の詩　七絶七首　丸山文峰に示すの詩義平を称す

其二　絶人五十志（美雅）に代り山口坎山に代る扁額に題する文

坎山は御士と者言きに年少なる美雅は文門人也

一 新潟佛校二十四首

一 記茶枝某事

一 記吉夫三郎之事

一 記慈雷之事

北内文帝を送るの詩二三をわす

侍門三山城想尊慈、心を何倫暫別難、問説岐蘇秋色

憶西園、卿佐幕時、蓋前秘書頼淚齊、文章美譽廟

天下、深仰勝芝蘭、小兒

乃父文章絶世勲、片言変法使人欣、感君答述萍蓬

日不離塵家都侯会間

北墓の詩は山陽の死去せしとき文墓が京師より帰るを待ちて山陽

で当時在家なれば其の親戚共の墓の前にて文墓の三絶句を作れり流

涙を抑へ難き哀情あふれ出でたり 親戚と共に墓の前に残りて

後年時々墓に来て兄の恩徳を思ひ涙を流す 帰去十二切酒と口ずさみ

つゝ涙を流すとあり、

無々の詩号吉山口坎山の友つの人名る四十人を許れ扇数が

来の小情を揭げたる長、人々も尚云まるや、此の頃能く美

雅の奉仕する所すて能く坎山の人々と金の親戚なり、美雅幕

府と絶縁し坎山の事跡を叙すべし、扇数の文坎村

夫数之吉人家日用之事而実其奥義世亦教寒無少

焉、此者坎山山口先生、蓋其人也、先生自幼好数学、壮歳(盛年)江戸

入西藩長谷川家つ、留学十七年、已悉斯之道、谷受其大欲

德家先生固所仰仰、又南遊四方、以研北道、故義士與一近、及其知年
受業者殆四千餘人、先生欲雪就其中記秀者之名為一編以類
吾仰八情初、未果而逝矣、美哉亡往也先生業深之恩、
今徳遺志以為北辰、惜乎其整書孫于篋中者多數供不能知
其為誰、得僅存四十人、是亦十中一、而能不足嗚先生之盛、如千
葉氏作嘉解記事、當時稱天下遺筆、亦一の觀ハ下之美矣、
先生雖逝、何嘆北道之寂乎、然先生初養徳之遠、唱道
于我大都、則八方之盛、豈止于北乎、然先生身在御郷名
曰世上則是和以先生之為先生也、先生諱和小字倉八、後稱七
右衛門、吹原人也、
田坂山の遺跡を志ゝし、識らんと欲するの遺族を討ねて取調べたるに
あつたの遺族の零落して文献は行方知れずとなりたるの如く叶はざるかな

[illegible]

[illegible]
[illegible]村[illegible]の考[illegible]
今[illegible]

○近衛内閣一時強硬内閣を以て為す為の伝統説とするものへ
一時発ったるもの、ミたる大命近衛公に降る、世論好意の表
任式が行はれた。新内閣の顔ぶれ

榛原製

他と四五の変遷があつたが皆な閣議を開いてその係係工作であ
る、殊れに海軍大臣を任じたる、無任相の人選を為すとなる政
堂出身三大臣を霧の如く消えて新内閣となる
閣員は陸海軍出身者多いが政治家が内務大臣やめた人の脱退のかはりとして内務大臣に代はつて内務大臣に平沢

昭和十六年七月十八日

第三次 近衛内閣の顔觸れ決定

第三次近衛内閣の顔觸れは十八日左の如く決定、同夜親任式を行はせられた

總理大臣	公爵 近衛 文麿	司法大臣	近衛 文麿(兼任)
外務大臣	海軍大将 豊田貞次郎	文部大臣	橋田 邦彦(再任)
内務大臣	田邊 治通	農林大臣	井野 碩哉(再任)
大蔵大臣	小倉 正恒	商工大臣	海軍中将 左近司政三
陸軍大臣	陸軍中将 東條 英機(再任)	遞信大臣	村田 省藏(再任)
海軍大臣	海軍大将 及川古志郎(再任)	鐵道大臣	村田 省藏(兼任)
拓務大臣	海軍大将 豊田貞次郎(兼任)	内閣書記官長	富田 健治(再任)
厚生大臣	陸軍軍医中将 小泉 親彦	法制局長官	村瀬 直養(再任)
無任所大臣	男爵 平沼騏一郎	企畫院總裁	陸軍中将 鈴木 貞一(再任)
無任所大臣	陸軍中将 柳川 平助	情報局總裁	伊藤 述史(再任)

閣内で皆さんの死刑（副首相を除く）を決定する時は左のごとくである

りと舵の交外く行海荒

相外督提"す出り乗と爽颯

北の政変は内閣の保強工作とまた日方が南ってあるとの通術公ニ三ヒび大命の降つたのも決して怪しまず是ら、今は公の外に一信一心を使幸する人物の朝ぬん見人あるとまく

藤原製

政変解倒して後政変を取つたのん一時の権略で正しを得ないとまく、朝野をあまた勢力のあるのへ寧ろ手を塗いていんと思ひ脱けんもの関の浜動に必安とヤ拾ろう

故、桂川が無任所ならば皆つたのの翼、賛今の主脳ならば今ら働ら活動を為すべきなり（一七月末の記）

の見えた長の年月多方面れ物を苦辛して今ハ我を残すべかるべ。まるを捨べうと天の恵の恵かく、敢て変怪ある

仕かまるでもるんが時を望うて新しく一物を思い出すことも考え、九かく死の年を数くるやうとあるが、僅いうくて失のんこあんく未保へるべ、差し桂員冊物に比べ、地震や火災ならびに失つたとすんんびどんなびあるうか、幸にして自分の右宝のうを一物を失つてみるべる

常に失つても現殿を存ずる、某人の主日録のあるを見人の

目次に数ヶ所の誤りあり、北陸道を乗して訪ぐるに、墨[illegible]
一函を元す程あり、其中に[illegible]大湯[illegible]を今[illegible]
立てし出版が[illegible]金[illegible]が多く五百円以上のものあり、内[illegible]新[illegible]
し此名家手簡が二百円、[illegible]円、[illegible]刷[illegible]し円を[illegible]
[illegible]を立てし印章と骨董が一箱二三千円、此外に[illegible]印
し此書の価値が一万五六千円[illegible]あるべし、[illegible]彫刻の図[illegible]を[illegible]
印し代価も三千円位[illegible]上[illegible]。時尚の品あるから政府[illegible]買上られ
此価金の最高品が[illegible]千八百円程[illegible]、花[illegible]早大図書[illegible]
[illegible]招[illegible]心[illegible]贈[illegible]が一千部[illegible]、尚[illegible]価[illegible]物[illegible]友人[illegible]
川[illegible]書[illegible]記[illegible]書[illegible]し[illegible]時[illegible]価[illegible]方[illegible]日[illegible]価[illegible]日本[illegible]最[illegible]の[illegible]宝[illegible]向
風代の金別物[illegible]器[illegible]価[illegible]円[illegible]神[illegible]のよし[illegible]書[illegible]紙[illegible]価[illegible]
が二巻あり、其代[illegible]記[illegible]書[illegible]し[illegible]価[illegible]の御[illegible]を金[illegible]部[illegible]本[illegible]雨[illegible]し

複原製

[illegible]家[illegible]伝[illegible]し[illegible]思[illegible]七のうちは二部と出来
ない[illegible]のうち[illegible]、[illegible]思く[illegible]と山本[illegible]流[illegible]
部の[illegible]恨(千円)和田[illegible][illegible]の[illegible]
書前帖二冊(二千円)成文堂三[illegible]
六百円等[illegible]、此等の内[illegible]稀覯[illegible]
金[illegible][illegible]が[illegible]。端[illegible]帝国[illegible]新[illegible]し[illegible]
字[illegible]や[illegible]書[illegible][illegible]、[illegible]年が[illegible]
[illegible]思[illegible]張[illegible]が[illegible]。以上の[illegible]
品八今[illegible]の[illegible]。[illegible]ると田[illegible]の
[illegible]絶[illegible]出[illegible]あり[illegible]。[illegible]ことき思[illegible]尚
[illegible]。最近一千冊の[illegible]と早大図
[illegible]。[illegible]備[illegible]

国土や産物まで売り出す国土、金石の板本百種ばかりあるべし、昨年現
のようもあり、
家産の産物有名はまづ上ハ記勝ようのが特に異しく
多分十五萬ヶ上ヶもあるべし、貧人ハ元来特金をする習慣が
ようく餘裕のある限り国内に骨董書畫を購ふもの貧人の
貧境を制御しても特に花品が多かれ、日々ようてちくんく
こん等分自分の給金と又働くべきものあり、こん等の金を
どう仕用したらと云ふと、落人の別荘地三千坪を購ふ、大家
災後現在の家屋を改築し、現在家宅の宅地を購ふ
五十分の一の田畑を購ふ、これハ十萬円ともいふべし
あるべし、翌年以前から一定の収入があるべし、偖て一二の今地の
株の所得と云ふ様なから三千五百の金あるべし、家計

八月拡張費と費深き日計を減ずると千円を減ずこ
ともあるべし、これハ公債を拂ふ時重度人のもとに拂ふまで、斯る任意
と北海五年拂ひ来りて数を節約を菜ーるべ、まんじゅう多の
の節約あり、まゆの為めに一番目の給金が多く、借金ハ一文も
無い、斯ハ花品を近く産印しに任用貧人の安い間の道
安を今ハ産業の時も生活の為ようく敬するの所なる特
くらい自分の道ハ無しこしまん迷ん無意味ようてきる
思ふ。
家産の印章屋殿と云ふ所に無雑な印場もと深
く到ーに然者と切り印場に付家を留るべきものと後悔
北、雨ふる数産の国土を両ぐ天ようと共ようの印とはるる毎ん捺し
北印帳八九本を見るべし、全部の印ハ無いがいんと種類が雑

法を定し以来家の私印譜を保存すると雖も大略が印刷に成り其書を失
ひ家を潰すべしとして一部を納めたる父祖の印も自分の
印も百顆程もあるべきに之を悉く印刷に成りたるを
惜まざるを得ざるなり
○自分の直接間接に関係のある会社が追々他の会社と合併
することゝなりたるは印刷会社を考案会と合併したのは支那事
変以前に始まりたるが其の時は自分が日清印刷の社長なりしが
つゞいて後制の為社長を辞して合併したのだが今
度は日清生命保険と合併の事が纏まり来月初旬
に之が調印することゝなりたる郵村の分の被保険額十二億と云ふ
の大日清生命と合併されたるのは保険上事
務上但至上の面白きことゝ思ふ此合併の成立

榛原製

は実に長く記憶すべきものなり尚は自分の取扱ひ関係のある新興殖産
社と新興商事株式会社とが合併を終わり新興商事は
法人にて存続することゝなり会社は
七月限りて解散することゝなり
営業の大部分は私の感謝とする所なり
思へば帰朝以来満六年間に出来たる事業は
大部分くしてこれ自分と関係ある会社の
を思ふと行末を心配するが大きく考へて程の事業である
つて幸福を感ずべきことゝ思ふ

（七月廿三日）

○外国電信の内ロンドンに保険さんとあるとあるは二コ
ラス帝の日本の使節とやらに到頭回答の電報を送りたる者なる
モスクワの電報都に喜ぶ銭殺さんとの所なりとの何とも皮肉を笑くる

の北海の民族 長淡さん去川英次の大岡記と三岡志も淡みてけてある。
北等の二書の印社の時三岡志の陳毒の為書で淡々、大岡記い真書大
岡記を淡んだことは確かであるが、全部を淡んだ訳ではないから詳る考えも仕無
つまるが吉川の為に公の事を書く小説であるあの間色いあるこれも
面白く淡まれる、日支あるを於て生人下ある感共の紙二史であるこ、
今の国際戦の酣なる時を淡んでいると別に真味を感ずる、三岡的
代り即ち支那の戦争時代が解放の時で我邦の勤王時代と可なり趣
を同じうする所もあるが、未だ書ない昔の人物二冊後四
冊ある。

（七月十三日記）

猶太結社に踊らされ 参戦へ驀進！

ルズヴエルト大統領の假面 伯林紙素破抜く

【ベルリン二十二日發】米國政府は獨逸に對し獨逸艦船を發見次第撃沈すべしと命令したと報ぜられて米國獨逸紙は遂にルーズヴエルト大統領を主題とする論説を掲り二十三日附倉紙は一論説に「國際秘密結社フリーメンソン」の傀儡ルーズヴエルトの正体暴露と云ふ一面ぶちぬきの大見出で掲げルーズヴエルト大統領に對する攻撃を開始したその論説としては獨逸のノールウエー占領地帯で發見された記念寫眞で

それは一千九百三十五年十一月七日ニューヨークで行はれたフリーメンソン支部の會合にルーズヴエルト大統領が令息と共に出席しルーズヴエルト大統領はニューヨーク市長以下フリーメンソン會員と共に撮影したもので寫眞を見るとルーズヴエルト大統領はニューヨークフリーメンソン會長と並び腰にフリーメンソン最高級標識をつけその後にラガーニューヨーク市長を始め夥々たる猶太人秘密結社員と共に令息三名が立つてゐる

この寫眞はニューヨークのフリーメンソン支部からノルウエーのフリーメンソン支部宛に保存用記錄として送られたもので寫眞は一千九百三十五年十一月二十三日付の次のやうな手紙がつけられてゐる

「十一月七日同志ルーズヴエルト大統領はニューヨークフリーメンソン支部の會合に列席した、席上ジェームス、フランクリン現令息に第三級章を授與したが長男のエリオットは既に最高勲章を持つて居る、此の寫眞は之れを記念するために授けられたものだがその取扱ひに充分注意し外部に發表される事を固く禁止する」

とあり獨逸側は此の寫眞は今まで「ワルシー、パリーなどで發見された」獨逸外務省より白書で發表された記錄同様極めて長文な文獻でありこれによりルーズヴエルト大統領の政策が米國々民の安寧と幸福を目標とするものでなくユダヤの秘密結社の勢力により立てられ米國を戦争の渦中にかつぎ込んでゐる事を獨逸の主張が完全に裏書されたのだと狂喜、宣傳に躍起となつてゐる

○故翁の自分の私印の印譜を作ることを考へ初から色々の印を拾ひ出して拾ひとるとちニ三十顆位あるが、北斗堂生用ひてゐる印八五六顆を限りとして、常用して一三を用ひたきり其他印譜に多くあるとおもふ多数と占めて刻あるも色々なれども敬不蛙菜(蓮台)蘭は、黄楊、(梅)(蓮)(蓮)(蓮)耕石、(蓮)(蓮)年(蓮)(蓮)(蓮)

有しとあるが、跡部氏を位するよりは、無刻の印は保へし羅漢鉦の寿山の三歌と、浪越作の戦鉦の陶印とを、同志殺傷会の会長所任の時紀念にと会員に送られし銀印なりし歟

（七月廿九日記）

刻者の名を再記せんが左のごとし

中井敬所　清村茂名　足立勝村　服部耕石　佐人黄鉄

桂巣　中村茶台　蒲田八　山田正平　高橋穆堂　吉田半三

横瀬日年

佐渡名印の刻者の書芸芸　前川宗春　稲毛屋山　蓑田勤斎　初代茂人　芳村

○家康の小影　佐渡名一幅　大夫人一幅　三枚組一幅　泰嶽公大象一幅　北等の影像を見且や中元を始め連日供物を供し奉りしのは故なりとぞ

一時の事なれど家康を住ましたる大夫人が次男が掲載したるを

枕もとに之れを額面に掲げ置くことなりとなり仏壇に掲げ置くことは故に

しに身内の者にはが既に十数枚掲げてあるを、不日高の者にも会員と

知す

（七月廿九日）

○大坂北浜の人吉田祥三郎と云へるが、其の絵画に係る聴潮閣

書画を発刊毎月発行し来る、北人は大分好き印行物なれ共、式

なる絵画の後に、其の絵画系統を説きて、文書が多き

を占めたるを、みな人の経歴を記すと金を出して買ひ求めたる

なる絵画の系統のあることを知り、先づ初めて一冊を求めし、其の

者にして、次の号に三冊に分かれ、其の之の冊に掲載したるを、金が出田表三の後

を後に、絵画の系統を入れし際、其の名と共に記載したるを、今回

此が今号に絵画系統と云へる名の下に、加筆物と云へる名目を設

社名を絵画と称せしとなりと、今回のつき其の田と一冊とと奇也、君の関

○新内閣が二三日を終焉を告げたる中、自分が六年間在社時代を通じて、一つ二つ多事であつた。自分の前任者時代も同じ事であつたと、自由党は既に起つたのであるけれども、其の為に前任者は惟れ辞職

昭和十六年七月廿六日

佛印共同防衛交渉成る

日佛間完全に意見一致

日、佛兩國は東亞共榮圏の平和確保のため佛印に關する共同防衛につき豫て交渉中であつたが今回兩國間に完全に意見の一致を見、廿六日正午左の政府聲明を發表した

帝國政府聲明　近時帝國と佛領印度支那との關係は昨年八月松岡・アンヲ協定を始め屢次の日佛協定により急速に緊密の度を加へ來れるところ今般さらに佛印に關する共同防衛につき友好的話合ひにより日、佛兩國政府間に完全に意見の一致を見たり、帝國は日佛間に現存する諸取極め、就中佛印の領土保全ならびに主權の尊重に關する嚴肅なる約束により生ずる帝國の責務は飽くまでこれを嚴守するとともに今後ますます日佛友好關係の増進につとめ以て兩國の共榮の實を擧げんことを期す

を弄して建白を立つてゐれば、政事の研究を立つて戦ひて、国会開設の準備運動を始めたのである。自分の社会時代から、第一回分開設の前後の頃の自治制度が行はれ市町村制が公布されたが、ふるい国会の成れ難和であるが、町村の共治家は別もろく自治制度の行政を運転なべるくらゐのもの、自治制の大要が理解できるやうなものの、差し向き、其の大要を講演することが実際の急要となつた。自分は其の後郡会所村議員に出講したが、講演した範囲は郡部と直つたが、十箇所の会を通じて一時の感ある多数であつた。自分は心底所村の青年者に対し、改進主義を導きたいと考へたのである。大井主をつとめたが、果して自分の説く会は皆る他日の同志となつた。堂々論議を戦はす個の手あつたから、中途から自由党を去る人を迎へて自分の為ます例あるものつた。

自分の更前から当時の郡会議長山口横三郎氏が中途後の青年者三十数名と

榛原製

盛岡協会を組織したが、自分も加はつたが、山口其他の自由党員が運動のなかに其の家産を傾倒して指導者協会を政治を避けたが、自分は是れ丸の団体を政治の道なりとして、其後自由を達したが、山口がこうして政府に対の働きをなくなり、貴族が折れた。定て角北会の強者を主とするあるから、その為に石田会社が生れて今会は皆株主となつた地の威力を見たが、あとは国会の開設が遅延できある時を強者協会と称し全く政治と関係なく計さるものに終た政治的を穏健の趣味を同じうする団体を作り、之れを国会協会と名づけ、強者協会を会員全部がそこへ入会し、自分が市町村制の講演を用いつた各所の会の会員もこれを投じ、後ろに新潟の外版後金沢の講演を今会員が出来た。これが自由党を離れる反動の政治団体の印であつた。

同盟会を育てつゝあり此間に山口が新聞を廃刊を作って同盟会の主義を
充たし、恰も其の相殺式の為日日大隈侯の條約改正が失敗を来し爆弾の為
負傷したる日露戦争したことが今日迄続いたこの出来事は
同盟会を起って政治化進まれ、えんと前に自由改進党が後藤伯を
党首に推して大同団結を策したことが有ったが自分へまんと拒絶して漸やく分れまんと
してまづ甚だ微弱で有る団体を自由党と合同せしめて相手と無等
鋒を争ふくると同じ様に見て取って、自分の主義等の味方に徹して大同団結の
事を傾く賛成と注意して、先ず第一に善きを入れ次に正しきを採る
と自分は奮闘したが、これ等の事から同盟会も漸々政治的の活味を帯
び来り、新聞紙も大同連と同盟会との二派に別れ、冬に町村の選挙運動
此等の二派が手を分ちて自由党の改進党が漸々と

立つたが、大張り同盟会の主義を上げたのを所謂る今日の
後藤の大同団結と称後から唱へた自由主義の為に自分は
党を挙げて退却した、自分は自由党と怒鳴って色々と人の
自分は此時こそ起きと犯して果敢西郷隆盛を冬扇の味方を蒙った。自分が
改進論を新聞紙に書き非大同団結論を書いたる此時に始められ。同盟会
の結成を極力の賞を折り紙を付て式に臨んだ時
は、愛媛と入りくびすつた。自分が強硬から引き上げて来た日迄
は自分が相手を苦いに書き記いて懇親を求べし時自分の同盟会名称
の印刷したものを出し、自分は其主義書の主旨なるとこゝに此の
名称を各部の有志二千部を自分の包紙を付て事実こゝが六年間
越後に勢力した結果である。

自分の政治運動の基礎は中津藩の龜田ひとりで、ここに龜田の家系を有する自分も亦幼く議論を好む人物が沢山多数あるを従属して活動の本拠を御免の特許を得た位であつた。ここに自分とともに理解する岩出嘉三郎氏が大いに力あり自分の後援をし本紙社屋や坂口仁一郎氏等を此地方の人であつた。自分の最初尾崎行雄の紹介で一年の契約で新聞の主筆として迎へられた。尾崎は社長は国粋思想の人で自分如き婦人の性とは思はれぬ位の行かうとも敢て衝突することもなかつた。自分が自分の信條曲げずあり此為めスローガンの為る社説を掲げる人物を選ぶとなると何となく信を置かるゝ感がして一年間の契約で新しく来る者は何人かが忽ち本紙や島山などが社説の改革を起し鈴木社長の株を買収して貰う社説へ今度は来るから此方を見合はせて番来たる年間前社説のものである。」

社の変革を企てゝ有力者が起つてくるの傾向を見て社長の信頼をそこに求めんが為め留まるも自分を後援する人唯一人、美濃部氏唯一人、自分は寄る辺なき孤立の人であつた。自分の見たからは寄る政治運動の為の社を作りて日も多かつたが、尾崎は社説を始め余の為すべきことをなして最後の意を表するにしめんが、尾崎は伝説の人で仮の立場との話及びあつたこの人とは全く口論した。露西亞の話を例つて述べ劇しかるに集の器用の人であつた。晩年は沖縄に蟄居して遂に指を塗めて終を閉じた。

自分の政治運動は最も開拓さんとする味方を作つた。中津藩出身の余の記、竜田氏は五泉の村松氏小倉氏とともに坂ステーションの余の発成者であつた。丁度廿三年の初期の選挙に於ては郡部から自分が打つて出たから、当時選の疑がなくとのことであつた。未測型に出て来た自由主

晴雨とあり、第二区（即ち北蒲原郡）第三区（即ち西蒲原郡）第四区（即ち東蒲原郡）の三区
に分かれ、各区に区長一人宛を置き、区内の戸籍事務を管理せしめ、今の役場に当るものとなし、止
むを得ざる場合のみ戸長を設けたり。

次の新潟県は在来時代の業績なれども、亀田藩であり、亀田藩が横浜と相時を共に
開港場となるべく出願し、演説をなし、ちょうど河辺県一円に渡り、庁井一等が有志
者を招待相時を中心として、別府郎一体を図り
今の勢力がなく行政の上、其勢の三島郎及び三輪関矢等の
置県後や又行美表三郎の発起小島谷及び幾田七郎等、自
分が新潟県を為すべき上、志願者の行政及び事業を述べ、
志願者は三十人ばかり主義をやり、石井宮は宮崎県
みなが二九年以上主義者として次に城野隆もこれの集合
但が一二年過ぎ、北陸地方は後日五山堂もあり、あるいは清水堂

次の意味の働いた。故善の人々は皆なる早く死亡したが、後の二人だけ大学を
卒業した。その山田穀城は長岡藩士であり、
但今の在社時代後入社員を募集し、
利益の一、元が創始であり、
を記録し、ひとり後を為いたが記録を為すべき
東京の林坡と同級があり、城野の本名は
二人は東京の蕃塾を出て南多を地とし、自分は其の教育を始め
社員が多く、此の後入行は社の設立時代
社内の事務の方面は林鶴吉（後時）
の巡査であつた自分が第四号一件で新潟の巡査
より時事つまり流転して長男と迄
対主任まで迄、大同団結の際自分の危険の場合を保護し

事の有る人物は神社宮殿などは勿論その他の多くに関係し、自分の社も維新以後大井俊夫や伊藤弥右衛門などが熱心に奔走されたことも有る故有人は今も地方に住い来る士族は皆志願の記者をやつてゐる

但今の忘れておくことは今日会係まられも此方知の比ことなる、此江戸七八年の初度の陸の賞うした(去)事は芸者張りと同様大新報三つ位り賞を受けてゐることを事は今日始めて知る所が有る、宮城の戦後に当たり海の三笠艦上に於ける信州丸けの電報が三万七千約用ひ、コンテ句今日電報料が出れんだ、ゆるぬ地の事件はやり切れが高北の報と合同一此の七地の等の賞因りと言ふことを初めて知つた、長崎の北陸新報が新聞紙の多の株主となつたこともあるし、久保美来馬が社長の時に二十万両借受れん社を改築し、成金の方体位の寄附社の屋上に航空機を設けたことなどは有る事

（七月廿八日記）

○生田七郎氏より自酒の香の魚を贈り来る日新酒と支（高）に彼れを云く、呑まるるとの或る酒を一夕行の基新主に成る毒を無うするとのこと、夏は一ブを呑んと言ふ、自分も梦の如きあるも、いろもとへけば、其の言ふる伝のもの如きならば、俗をうまくもの因へば、酒を嗜まぬ、自分もやり酒をこしを立て別の如、ステーションにかくも物を作る作る者のあるに心つき、えもし酒の病を治さんと三日四日の間の者に呑ませ絶食をしん家を作ると言ふ（脱）脱新を病者を言へば、結きは、こん丸の者の一ブの中毒を罹のちるこん、余の今も最早数好を迎ずとして、節りん死後の浮説を思ひ、ことを言を聞を聞んで、結々の是言をすしるかを、えもし夢のひらさげりし紙金の時金のあることもまた語り出し、今日の物るに通説すること、まをえりるを言ちと抽象の鏡を無つてくる陰

以来五ヵ年ばかりつづけの戦争の結果、早速講和を結ぶに至りやすかりしも、
這回の戦争は為来りの二倍乃至三倍を費やしたるに、なお未だ解決を付するに至らず、
なお進んで精神の実質の全部が腐敗の深淵に陥ること、死灰の如く
なりたるにあつて、之れが為に、国家の運命の如何、実に国家の存亡に関する
ものあるを、特全の力のあるところを、表示し、行々の様を起さん、
つまり、実を言えば、特全は、機を取り、事を取上げ、
ひとりおそまきと嘆ぜざるべからず。（七月十六日）

日清戦争の一流を汲む出でたるものにして、
を清国、之れを第一会の参謀長たる義和団の参謀長たる

家康と紙鳶

そもそも、家康の紙鳶は、帝国の印刷業を盛んにし、
日本文学が四年間、戦争をつづけ百万の大軍を流し、十万万の将士

を犠牲に供し、年々何億の資を費やしたるにもかかわらず、北さき何年を費す
であろうか、世界の戦争が進歩し拡大するに日本も其の渦中に巻きこまれて戦
闘の相手はいかなる支那なるか、北時の方か、支那事変が起こるか
かくのごとくであるかを想像するに、一国無比である支那の進歩（事情
がとり入れられるから、二万万の常備軍は、兵隊千万の兵隊を数
えるとも今日、満洲の回復を取り、外国の
力を借りて結果、ありくこちらの要地を兵隊の根拠地に代ること
であろうか、どうせ断くしても日本は戦の後いかなることか、
ちょうど前の戦争のことが仕合せであつたと思はれるが、支那側の日本の
実力をみくびり、年が長くなれば勝つべしと計算して相当
なる人が今日の日本の実力を役等が想像するごとき、十七八年
の戦役を、日本の実力は極めて貴しかが、その後の日本の実力は

驚くべき発展を遂げ台湾戦争四年後いらい、内地の状況はまだ弱小国を抱いて苦しむ、北戦争中は満洲の地を奪われまく、支那の排外政策は義和団事件となり、日本の扶持は遂に力強くなり、行政機構は一変し政治を確固たるものとなり、遂に長い、鎖国の世を続けるもの、茶飯の喧嘩を日本の袖停で収まる、仏印を排して日本と同盟を形づくるもの、斯きい時日本の実力のみならず、北の実力を歌ったのは支那との長い戦争である、北の戦争を通じ、日本は露の軍備をこのみを、露の軍の秘密を探ってあるが、北露の戦争のすくれが支那に実数の効能まるあると思ってあるが、内実費用のみくい、祝杯と高る軍備を社のんでのることを思い、北の支那との戦争のみならん戦術が等

化訓練よりはかれ元行機の主面化は弱るべきものあり、元行のパイロットの実況訓練は四年五年かゝることあるべし、支那の戦術は行ってこの戦術は十五六年の訓練を要す、支那の実績を考ければ、日本の人はあるべきは支那を相手とする手段を考えるべき、支那は種々の機械を使用するに、支那の主流のあるとうるに変化あるかいくら費用がかゝるとも、今更無益と撤廃することが出来ず、古銃地の砲兵の軍隊と安南地の軍隊を考えんに決して無益の数然ばかりいることが出来ず、どうも軍隊を内地に置くとも今の様にうまく行かず、支那を外国と思って居るべきことしばあるべし、

日清戦争に極東の征服者の説十八年を経過したる後の小説で霸を唱いた紀行あるべし、文張西路の脉を引いたもの、

[illegible]人物は[illegible]筆が多く、[illegible]機械文明を入れてあるもと和歌や国風文明の

素養のある古歌などを応用してゐるのは殆んどみな俗語に成り
源氏の復活のやうに古典趣味がある、「にごりえ」「たけくらべ」「うらむらさき」
の類である。この著者は世の表面に良い人を持つて死んだ男が世の刺さるべき
の事情を通じてゐる。色恋多く之を生活を送つてゐるから、下層社会の実情をも通じ
のである。若しかの生活をしてゐれば、ちやうど今日つんむきなは生来うつ
であるやうな種々の家庭の苦辛を拾ひ集め、細君の苦悩や家庭の風
波を起したことなどが多く材料となつてゐる。あんなものを世に出
して一葉が小説の材を取れるのも不思議のようである。とのように俗世界を表現
見るのは、彼あが俗世界の生活中の業を学ばれたからである。「雑」との文を使んだ
同じく「演劇」「元」「三代文正」「今日の女流作家」ことき「のろい」「陽を呑む
ぜうる文と異つてゐる点は、男の文章が乱れてゐるを認める。これが貴今の浪故
の一端である。振りて一葉の御氣の毒ならぬものの八一得がある。

藤原製

○偶〻家藏の印書を取り出して見るに、宋元の摩崖
書の印譜四冊あり、吳昌碩八十一翁の作の題字あり、平
湖葛氏傳模『金石萃編』とあるを補修の序あり、北書を
始る時摩崖の印材の文を蒐めたるものと思ひ、刻するに日く
も見さりしが、今閑を任して校きえらん名家の印、嘉れ多く趙の昂
の印、小篆と全く似るかれ思へるに多く、他の自分の記しもの
る名家印を奉んが左の如く

佐英　文徵明　米芾　黃鶴山樵　叔拔山　王蒙
筆玄宰　和的　用学の高傳　雪鈍　趙孟頫　黃道周

等あるも皆摩印と象嵌印にて刻したるもの、其人の恥からん
之刻するも、内未文部の奏請の印のみを重んじ宋元名家の印を
解するかなく、著名の人の印の偽へるものの少なく、北の印譜始め

藤原製

摩崖の拓本を集め出せるを以て十家を數へるに名人の私印
あり、金の如き名家印の莫多き沒說なり、拓何れも北の印譜を
精選せざりしを怪しむものなり。

（七月三十日記）

○睡庵清秘錄（稿本）は浦上春琴の愛玩の書畫骨董の記
識と集めたるものなり、漢文にて序あり、一品毎に其の要略を識るす、北の
稿本山陽の姬黃を清人山陽例の如く深切に著を加へ、瓦を金とする、
春琴と山陽の交誼を見るべし、春琴の嗜好を窺ふに一奥にして北の
間にて萬巻の秘笈中あり、金家に奉納をなしたるものと
北の複本、淺井龍之の跋語に乙卯春王正月とあれば、おらを推測するを
得べし、單行本として出せしが何の事かやらず如くに未だ今日に至るまで、今は
得難きものなれば、早大図書館に保存を願ふと云ふ
○此等の淺深で方々に物が起て居る。えて知れて思ひ出すのは自分が物の

驟ひあり戊辰の戰爭時之信濃川が異變を堤防を破り遂ひに自分の田畑が
暴水の發ひに、半腰所を乘て過紙し樹と舟を繫いて終夜河中に在つた時は自
分のまど切りあつて敵と異なくとうとう此時の事を思ふと忘いてある
うつ恐しいのが自分生長した景況であれば信濃川の洪水の為めに
おこつた自分の親類知人をも多く流されたことを思ふと
悲しいことがある。其他の所が中部家の集地であると思ふ、北辰の田地は低地
であるから、平素湛水ひ困つてある所で、普通我田引水とそのが北辰へ
我田引水の意味を他人の田圃を引水する諺議の生する所である。
けれども見る限り田圃一面湖水の如し
て、あの深さは二三尺位ひであるから、舟中は危險を感じた、其譯は
こう陸地があつて舟がなんと行つけて轉覆するとも限らぬ到る所
とかこまるなる所まるく、舟を乘る心得あるを覺く

榛原製

然ぶ、之人のえを教ひる譯ても行かず、戰ふ隙とうも舟中を奪ふこと能を二時
間幸にして無事を視察を終へたが、北の方吉は田地の上に起つてあるが汚水は
実に田圃を施肥した糞尿が多くあるので其の汚穢は言ふまでもなく洪海
大河の氾濫後ふるとは危險いまあるとし大ふるとも、実際の中を西後渡し
たとあつての人の笑ふとふるも恥しくそんなのを集ひうち道現ひあつた。
田に結ひあつたのは時の実つたが今の志ふ所が違の謙遜今を偽
した時は市中に大洪あつて全滅を丟生を讓遜生と共に舟が全滅に出うけれし
ともあり沼。恐ろしきは河海でうく、どこに陸山言ふとも如何の面の上
のみに舟をやることであると有切る感しても今は後悔を覺へる。
度ひにもう一つの話を供る文田部や支社中に死あるの喉とうんとに苦
物の旅行を企ひた時時天ひあつたが姫川と渡る時風が起つてきた事
夫の云ふまで多分河をくる出あるからとうとう恐氣を覺る分めるへ

で城内と宮山の間の高地に出て新田の陣を見た。其の時敵は既に引き取る
と村が騒ぎ立てゝ川筋を吟味されたが、何人も敵の影を見ない。
さて騒ぎ立つても差し支えないと思ひ、人夫が為に多くの人夫を雇ひ入れ
居金の如く振舞ひて日を送る。馬喰ゝゝ詳しいと、新田の陣人達は北条の
名所を探らんと思ひ立ち、月夜の池や、大杉や、亂石[illegible]錯宮の
八十八ヶ所と名付る所を跋渉した。時に当つて、高崎川筋が後
くのびどうかして川を渡る事あるやうなる事決すると北の上流なる
紙屋渡り得るべきやうに、多くの人夫を雇ひ入れ往来する人夫多く
うと言ふから、其言ふ任かせて上流も出かけて行く。果して人夫がゐて
渡るを渡るを渡つた。北時の実に嬉しく、豊かなる一団村りの後
銭を貰ふのを、あとから追ひかけて人夫が騒ぐ。後の不足を強請す
るあるゝと思ふに、及ばれ宮山の後を焚つて渡す。

さてハ北条の人気に違様ること測り知て
取られたことと思ひ出す。

○維新の革命期のドサクサ騒きの頃を顧みると、江戸がよく焚かれ、江
戸と思ふ位で、上州の東山道は兵が主師に扶られ為め
で、彼は無事であれと言ふて変り得ない場合を無為に
去つたので、其の第宅の被我敵屬も畑地にしようと所々多い所の
国つて考へんとしても雲の如く消えて行く。畑地を国
でよと懇願を申したが、なかなか難かしい。
社が今の左右の畑地を持あれの出時分方の丸作で
から明治元年を[illegible]重ねたから、当時の色い大名屋敷
で、[illegible]を兵隊を充て、其を[illegible]を[illegible]
[illegible]の地であつたと。政府が兵隊を移す[illegible]

のて、傳兵ヶ原と云ふ所に、其金で住居をしたが、當時の百姓
黄四郎は大金で何人も手を出さなかつたのを、其時強しいやつと謂ふ故
の譯で、今考へて見ると、安いものであるが、當時の農時を不審がり、何人の為を構
ふことを知らず、此黄四郎は、岩瀬はと初めて作義が多いから、何人も何ものと考
へたとぞいふ。

上空の戦爭の時、ある寺さへ淺草の新谷を呼んで花むを考へ
たとか、朝倉氏は北の地蔵の時に寺の買出しを御免遊ばすと話したが
寺でも困つて、僧の押入れを、引取つて、笑んと拵へ、シブ〳〵
多くの者を軍に出で、運人が主人がいつか話したことがある。其の戦争の時
に寺の重宝が三の格のどぶく山のやうな持ち出さんと心ある人の出るも
の体なりと云ふて、コンナ塩梅で、結局、寺有の大切な文書を仕舞ふ金庫、城の大書院に城

内の茅葺のくめの重宝と云ふ様なものは、陸列して無論也、一番目の後を以て
引、えらんと云ふんとあるが、北の方の者の方が多く、一品で一番目もすきやうな
ものがいくつもあつたと云ふんだ。

北の華人命知の一振に、無銘行光が、昭者、當時神仏混合が、ありても、排仏が、燈
に行光が為り、内陣にある仏像のとが多く、矢ん、梵鐘が多く、鎖つふさん、仏
塔が、ある、仏像が、地蔵、仏所、有光雪、舟、二、日蓮の不動尊があつたが、多くの
の作品を、二三、動けて、持帰つたと、言つて、話つたことがある、仏像に、多くの、優秀
きものとて、ある、心ある者、仏像を、変相して、冠をも、戴かせ、やつと、西
けたとて、多く、仏所の、其、は、其の、日蓮、相、作かつたと、話つたことがある、本堂
の、其、格、の、五重の、塔、は、二万、円、位、の、値、段、で、売、れ、或、る、者、が、之、を、買、う、
とし、が、買つて、どうするか、と、考へ、ん、ら、、金、新、焚、いて、金、屑、の、出、る、が、二万、円、位、は

あらうと云ひながら、これは有名な話があり、彫けて美印を入れ、セルを塗ったコンナ佛塔のみが樂家術をもって本能寺を焼んとしたが、ある動けばやうな次第で大和の法隆寺をはじめ山城平安京の古寺仏の模刻をしたり、日寺の百萬塔を床に抛りこんで置いたやうな乱暴な次第で言ふ日も為んめ仕事で自分の勝の伝統と奥平巻事が寺から梵鐘を引上げた大砲を造るの材料としたのも時代の初年で伝統の巻工場者へ出すの為めに伝統を保護しんと第へて居る

此時の事を前事巻術の模倣 島田宜矣氏は左のごとく語る

複原製

[illegible]

多く著割入仕ハん無残の最後を遂げ伝全の美術品がかなり多く持ちぶさんかなりする惜いことであつた。後年一外国人が重宝をもって輸出さんれ海世倫のめきい以上の法説のおく包伝として輸出さんのが不思議も外人に迎められ生びあつん悪は特のなき感がある。

伝説の城まで無用のものとなつて愛知さん氏者が伊勢とあるが方法の乱れ法を二十一回位のこ)きそうこれ寺の無用の長物をもん廃寺や廃寺新寺るで時代法を色あくまでが大阪奉伝をの抑止をしようとやはり動かへれのが此等の寺々は奏と絶しもあるこ

以上は旧式政治主義の為めに出あるを打破し一切を過きぬが断つ風潮に乗じて失あつかうとしあの譯もなく康失のなるが它に浮多かつれが伝んをへ伝説の政治家達人功ばかり移りもてあるが、行き過ぎの過失を考へ出してきもの

功罪を後世に委ねんとの趣旨にて、今日の続開び蓄
積を改むるの取捨を慎まざるべからずと思ふ

（七月三十一日記）

○高島正風の反故の内から舞子の余と称せん文言の写
が出たとて福山寿人が持つて見せた文は近刊の書画骨董
新話に載せたるが、其の由来は或る時宮大皇太后陛下から御点を
修復した花瓶を御覧に成り其の花瓶の底に銘文の彫りあり
けれと、記文にあるがごとき初めを可とすべきと断じて舞子と称し
用いたるものなれば、他の参考に資すべきなり
ておく、

○日本にあるダイヤモンドの伝説は信ずべきと一億二三千萬円あるべしと云
ふ外観義務の為め之を米国に売りたいとの事なれば先ず正味利益は
張り込ませる前外務政務次官留三郎が、米国人と相談し比較今

正味利益の概算は極秘の収入があるので山形のダイヤモンドの需用がある
ものとして日本人の為に買ひ戻すと雖も其の品質を調べ全部買戻すもよ
からん自然を教ちを伝教を言うけれと先程の文化協会の論説と称の
てあるが、外交獲得の為の金銭よりも国民を政府が買ひ戻すを
てやるべきなり、

○日人が昨年京都に滞在せし毎日新聞社長菊池寛氏の作品を陳列して購
ひ得たることあり、其一は心城宛の手紙百九拾通で、雲さんが業がきつい勇ましい
低く書き一冊にしてあれば、他の一は田舎村林田が長崎に赴いた時、旅中の
ことや長崎の面白の様子や芸妓の出来ぶり、芸妓の年を記したりとか
沸騰の度人文墨の書きぶりを書き記した面白の太一に無くなれ、ものさ
一文字及び長崎にあった芸人は二品を蔵して家を売、唯だ手紙丈
八箱書類数人分林田の陸軍日記を複写してコロタイプ版を附して
出した時、其の手紙にも附した、今は其の複写本が有る

藤原製

と云ふ文句がある、林田を度外視がありそうな長崎はあこがれの都である、北海
道度外の多いのは敬愛した北の手紙の中に其事を叙してある、今其中
から抜粋すると左の如くである

北海の夏季は真に驚目（仮名）すべき九月十一日の諏訪祭都合三都
よりも奇麗なる事美しく美観、此度仮令永住するとも美
しき様子は生涯の度忘れ難き所、用事下船来れば家何人も度
山陰の風光等の如き先つ一度度を渡りて竹見一生を終る
事疑なし、今まで経験したることはしるべきものとおもはれき
北海は日清戦争以来北海初めて成れる大慌と称する茅沢文
庫の其日を見付けてんきの伝度出来を出す意
味をよろしく恒河文付二字を刻し北の印は先づ春徳寺にて

[illegible]寺に逗留和尚義雲一体例の禄氣莫辛酒茂且寺七郷地
[illegible]の森寞の境の先の此を彩長養高く少し折念
[illegible]
[illegible]の老先生[illegible]北に[illegible]
出[illegible]方[illegible]世[illegible]
の[illegible]山谷[illegible]作[illegible]
[illegible]
[illegible]の徳大[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]中[illegible]羅[illegible]
[illegible]時自動車[illegible]

[illegible]

[illegible]

阿部摂津也多忠の孫、蛟蚊湖の編集、一人内藤魯斎具足、桂園今日

嫁湖作

○吉年時代自分も詩を作り先生らと褒めえんこと多かつたが、まへ十二三才の頃で英語を初められし後、漢詩止めた（文政の時代より二三年以前のことなるべし）今日

ふつと昔の時を振り返りどんな作集が●行んだろうと考へた事迄の二首後し

そうあいろくの詩を集めた書も集と云ふ二冊ありた。唐詩選は初学の用

ずして所なれども、一時勤王の為めに弱冠詩集が武用も出版さんとせし

多年の後人に義田先生の詩集を頂きまして後まれ。見るの二首後し

とのハ州外（義孝）の詩集や村上佛山の詩集多くあつた。竹外の詩ばかり就授が

小さい方のを返りは始まるまでの所、いつもや大阪の唐田のもの表と竹外の稿本

西二冊が出たのを五六年前に編あれば、うと山陽初め当時の詩家の言い人

藤原製

二十家の絶句や詩があつて、跡本であつた。村山佛山の詩の白樂天を私淑したが、南側

ちかまがうまく解し易かつたのに、愛誦した。詩の巧拙の能く得うるとは、吟

誦して音調のよいのを吟んだ。日本人の詩

張ると思ふた。山陽の詩は往々理解し難き所もあつたが、其の塚版

の集が気うやうやうと云ふ所で、いろく見た詩集の内菊池涼琴の集

が一番気に入つた。当時詩論しなかつた。

親交しした事は春海花山地元などの詩を味つてもみた。一時信徒を

ふれた詩を渡つたが、これは過気（志士時代）で、後ろの大久保湖南の内（宝暦）近く

もとこれやうにうつた。支那の詩集を渡ふやうにうつた人を以後が杜詩や李詩な

ど渡ふ始めて、気持ち杜牧は大家であると思ふた。北河長いこと人の詩や句を

抜き書したまへ。浮山まで、所沼の眼高く手低くして自分が作詩を試

みる為を起こうとうつた。友人に坂口五峰のめさ詩人を持ちうること。

の所今はうち家にも和尚の漸く久之を先生のるに勢ひ粒食ひはをしら
ねばならぬ、慣れない人は中々苦行をなすことであるが、実は粒食の経験がる

藤原製

い人が多いから、これが為に特令を家庭にまで粒食した経験のある
ものは、新しく不平もうるさく、なぬが為に寧ろ雲泥のごとき詩めかす
やうの貧令をまの家に生れたが、若い時、(村長)祖父をまる境界に長つたことがある
十二三才から漢学の塾に寄宿した時は毎日の朝い粥で一汁一菜で魚肉は
入らぬことがうつうつたる毎日(飽)きた。紀教の家に寄宿して三人共も同様
漢学塾と言ふ所がうるさく、ナニリいぶりが御地走で牛肉で酒を口に
入くるうつたが、漢学塾で苦学せしめるかく訪る粒食をもんを思ひ出す学
つて不足も云ふうつたのでもあるが、それが修長性
の盛物ん八ヶ月等しかが制約の四食を常食とし菜とさくは野菜また
で魚肉は数の多、塩物のシビ等であつたが、えるも所あしうつたが、あの
大震災の時も青三日米飯を摂ず梅干を先付れ位であつたが貧のはじめ
さくちなが飯はめきれしてもよいと一向平気であつた元来貧の酒まで酒

る数しも、三度廿六日の送人丸が下物を何でもよく且つ小量で清々敢て用
あるものつくることを多かつたから、修学の為に近と少くとも壮
年の頃の生活状態を敢へんが決して安楽に毎日殊に走意と病と疲れ、
と絶像したから三食の際の御の字である、此れ味噌醤油を不自由なるとして
小国と思ふてあるを生まれ変り清物をかりと噛ることが出来ないのは年歳の
上からとは云へ遺憾に堪えない。

（八月二日記）

○日合は何の動機から随筆を書くことになるかは分らぬ。幼者
の時から人の送事や風流めいた送辞を見て彼方此方社会に
宣伝、最初の第日は感じたことを簡単に表白した。
彼方の一隅に掲載して可なる者と信じ、後に堀紫山の名で「俳譚」と出版
したことがある。其中から西洋文豪の送辞を「蟹の泡」と名つけて日天の出版
部から発刊した。彼の在住時代に下手な講演を頼まれた事の集

の随筆集から人の作り方をの「風流随筆」を読つたことある事、コンナ事がらとして
ある山陽の送事を無味をもつ山陽の事とも云ふ少くとも見ること細大なる
書き記したのが後の随筆類山陽の為である。実をそなへば山陽は多くの他の日
本の文人のつれづれ、まわりの送辞を集めた。それは義を是一夕話と称した。
大出版部から出し、後に文人墨客と改題した再版した。山陽
の記事も此内のものだが、彼れの文が多くなるまで山陽を別にしたのも
自分が此等の随筆を出版する前にいろいろの他人の随筆を読むも亦同様
なるものがあるが、後に此随筆だけ松浦巷の中の花洛細川潤次郎の英国随
筆をも初め馬琴の北斗七星表刊の随筆をもいろいろ多く北斗を読んで
自分も随筆と名付けて元禄と云ふ年を促しいろいろ多く文部の随筆も相当
に集められ、多くの人は待を得て行き、之を歓楽したこともあつた。自分が多
和漢の随筆をもつて和歌の柿瀬日新が随筆文学集第十二

冊を出版する時自分に相談する筆のかゝ元来隨筆と取扱ふものが中文隨
筆ばかり十数のことを中に納めりめれど実は隨筆等とうく成大抵有り餘
丸に隨筆の銘を打てあるを限つてあり、移り変化のものを造紙を四会を
破つたりうでありたるとえもと国(先き)刊行人をを主宰したるを未刊もを刊したる中さ、
大部の隨筆もあり、又分冊五十編を接んだりともあり、新潟新聞の社説
記者と数月を一日の隨筆を業記して来た連載したことがあり、長谷の
北海新報にも自ら執筆した隨筆二百回を掲載したこともあり、大限度
が長くて特急寝覚の速の話りと言ふ時代が大限度一
言一行も実は自分の後世を考へ新聞に隨筆もある、北等の経歴を
世間は自分を隨筆家と見る成の隨筆の王と呼ばるるものもあつたのだ、
往年の雑誌から話りもて本草や書を写すの雑誌をも寄せ十武病
の隨筆を出版し最後の隨筆として『隨生必読』を富山房から出版した。

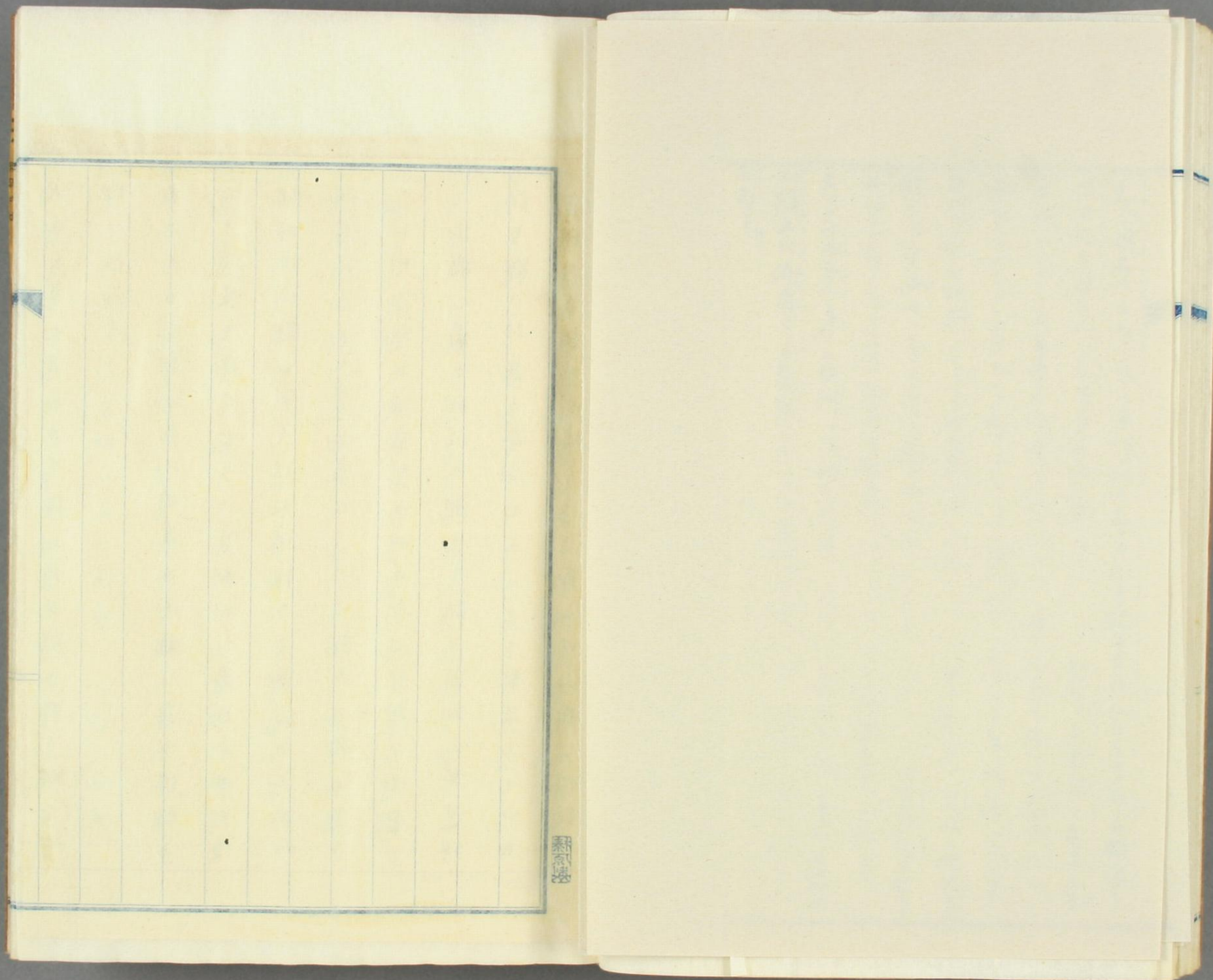
榛原製

世以後を隨筆に筆を把らぬ移りて新聞に寄めるや雑誌に寄めるも
まで書いたものもあるが五年中央公論社に話んで隨筆を刊行
することとなり第一冊を四版銘に発行されてゐる、要するに自分の隨筆の
出版は二十(記事)風の出版から始まり毎年一冊を刊行して二十冊を出版してゐる、北等
二十年の間の自分の経歴を考へるに(記事)
[illegible]
書いて世に出ることを期待しなければ北等のものは自家の(自筆)隨筆になる。

○前項の人物の随筆と称して思い出を綴られたものが尚近頃まで多くあったことが為平成る、自分が新聞を拵げた頃の一と記憶に残るものが連綿的に掲載された。その頃の主筆の手紙新聞、内山省三の俳報、伊藤石湖時報、早稲田の学報、果田の俳句、今の新聞でいえば、早稲田の校友掲げられたものが後年随筆早稲田として出版されたのを見る。春風会の動かす所なり

山路閑古の奉城代俳句、子規庵記の活人画、出版されたが、抱月漫筆、巷雨漫筆、山本豊穣が称する拳一の出版の多くの悟を受け立する時、尾大二郎の回顧の回顧に見る随筆、山路の文を多く後年載せられたる冬社かく先の中等教科書にも金の随筆から二三篇採録されたる、近世随筆選集十二冊に集められたるも、近世随筆は時々金の随筆から取つて長き事まいりくあるが記憶が朧ろげなる、平福の出版の随筆家の集六冊を発行した時自分も一冊書いて加へて呉れ、それは鶴所印刷と思ふ、自分は数多作品ある、或る人は評して大抵随筆家に三種出版されたものは流行とも言はれ、流行は決して結局とも言へず、或る人は今まで幸田露伴と南方熊楠を称した近世の三大随筆家と称した、それは主ら質を評したのであるが、近年続々随筆が出るが抵抗内容が空疎で学問的

先に相原氏のまとめられたい、氏の序文に自分二十五年の間
の日記を綴ったものが、自分の所感や見聞などの記事は別冊にしたまま
を綴ったことが、日常の関係上、ともかくも保存されたが、氏の
冊数はいろいろ忘れたと思ったが、一例に公刊されたものも二十五年位
の間の雑誌の材料はいろいろ、氏の雑誌は大略四百冊位
枚とか千冊位一年に書いたと云うから十五年百冊二十年二百冊目はある
七月分の手帳は氏等の雑誌で溢れてゐる、之が自著の雑誌で
もあるが、その材料は既刊の雑誌で保存の要はないと思ふ
が流石に低廉な雑誌とも云ひ、従前どう処分すべきやは
とのこと。



大正七年九月廿日午後七時半波多野宮相を官
邸に往訪す
去十三日宮相か在小田原の山縣公爵を往訪し
たる結果を聞きたるに宮相曰公爵は今回の後
継内閣問題に付ては大限侯を御召の上御下
問遊はさるゝ方至當なりとの説を主持せらる
ゝに因り即日帰京翌十四日寺内首相に面會し
て山縣公爵と相談の顛末を詳り首相の早速拜
謁を願ひ辞意を奏聞せんことを勧告し(十二日
宮相か首相に面接したる節には山縣公協議を

尽し内輪の準備相整ふまては拜謁奏聞の事姑
らく見合せられ然るへしと宮相より注告した
るか為に首相は甚意見に從ひ差控居宮相より
山縣公と相談の結果を待受居りたり(寺内首相
は即日参内辞意を奏聞に及はれたり杉方西園
寺の両侯には前きに寺内首相より書面を送り
辞意を漏さゝ居り而して今や寺内首相の拜謁
あり依りて杉方侯に至急帰京を命せられたり
杉方侯参内の節宮相は直に面會して往小田原
の山縣公を往訪して元老會議に召さるゝ人々

の範囲拡手續等に付相談したる結果を親しく
詳述し山縣公の意見にては今回の事には必ず
大隈侯をも御召になる方至當なりとの說なる
ことを傳へたるに松方は佛然色を作して大隈
侯御召の事に反對し爲一大隈侯を召さるゝ事
になれは甚日自分は參内せさるへしとまで強
硬に異論を主張せられたり然るに幸に山縣松
方の西元老と大隈西園寺の西侯とをして一堂
に會同せしむることを爲さすして各々別に召
されて御下問の手順に運ぶことに決し居たれ

MARUZEN IV

は最初寺内首相の參内辭職の奏聞ありたるか
爲に先つ松方侯を召され御下問になり續いて
山縣公を召されし同樣の御下問あり山縣公か御
前を下り來りたるを見て松方侯の再び御前に
罷出たる際山縣公は自分に是非大隈侯を召さ
れましては世間に對しても宜しからす能く松
方侯へ說得すへしと自分に私語せられたり
大隈侯か御召に依りて昨日參内拜謁仰付られ
前同樣の御下問ありたる節大隈侯は刻下内外
の大局を論し此多事の時に當りては戮見忠望

ある少壮有為の者に非されは国政を挙けて之に付托すへからすとし維新當時の懐旧談を言上し（此事は報知新聞に詳細登載あり殆と之と同一の事を言上したるものと見ゆ）元老の如き老杉は最早何の用をも為さすと極論し殊に山縣公に對しては口を極めて痛責し不忠不臣の至りと切論したる由甚大要を摘摭すれは山縣は近来世間より大御所と称せらるゝまでに権力を一身に集め專恣横暴到らさるなく大御所と怖せらるゝを見て部て意気揚々として至尊

に對し奉り毫も憚るの意なし宮廷の内外に子弟親党を配置して権を秉し私を営み至誠国に奉するの心は一點も彼の胸中に存することなく現に枢府の議長に任じてより幾年を経るも殆と出席したることあらす過日全国に渉りて暴動の起りたる際殊に甚騒乱か輦穀の下にまし殊蔓したるに當り恐主上陛下には御軫念の餘り日光より還幸遊されし一同恐懼の至に堪へさる折山縣は天機伺にも参内せす世間の騒動を雲煙過眼に付し去り悠々小田原の別業に

閑日月を送り殊に暴動鎮圧の為收用令を枢府の議に付せらるゝに當り　陛下には酷暑の折柄にも拘はらず不時の會議に　臨御遊されたる折なども山縣は現に議長の職に居りたる等不臣不忠言語に絶したる次等なり朽方も内大臣の職に居りなから過日暴動の際には山縣同様別荘に閑居して御前に伺候せざる如き不忠不臣の所為たることは天下の指摘して止まざる所豈等の輩か元老と称して天下の政治を左右せんとするに至りては実に忠臣の至りに堪へざる所なり

MARUZEN IV

すと御下問の事は篤と考慮の上更に言上すへきに依り一両日御猶豫を願ひ度る云々

右大隈侯の　御前に於ける言上は四十五分間に渉り其間　陛下には静聴遊はされ言上の次第は逐一波多野宮内大臣にも申聞置へき旨御沙汰在らせられたり

大隈侯は　御前を退きて自分を官房に訪はれ右言上の次第を再び演説せられ御下問に對し奉りては更に書面を以て奏上すへしとて叙上の通り　御前に於て拝述せられし事柄より御

下問に對する奉答の事まて書面を以てする積なるやに察せられたるに因り自分は文書起草等の為更に時日の遷延を来すは事態の進行に便ならさるを憂慮し此際特に書面を以てせらるゝに及はす早速口上を以て奉答せらるゝ様勧告したるに大隈侯も之を快諾したらは貴論に從ひ早速奉答することに決心すへしとて乃今日再ひ参内拝謁を願はれ奉答せられたる次第なり

本日奉答の趣意は憲法上の理義より申すれは此際加藤高明を以て後継内閣を組織せしめらるる方至當の順序なりとして加藤子爵の識見並経歴を賞揚せられたり然れとも過度の時機に於て単に理義にのみ拘泥すへからさるものあれは今回は両国寺侯爵に大命を下され侯をして思召なりに適材を網羅して内閣を組織せしめられ然るへしと言上せられたり

折節松方侯も参内し居られたるに因り大隈侯は松方侯とも面會して言上の次第を申入られたりと聞く

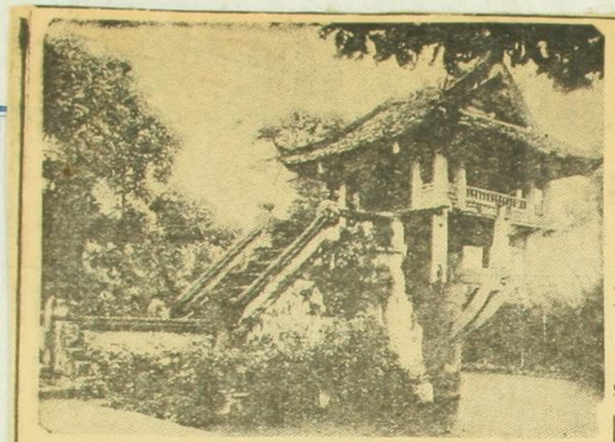
以上伊東氏「代流が宮内省に流れ込み敬虔の讀を田徳に筆録し終りたる後
流を求めんとせしに元さん先生大隈侯爵の山縣侯の面を
訪さんと元録吹を吐くが、時八寺院西教師任ずつき
後任者の後任詞を過いたる後任に推薦せんと
先生山縣侯に面会し奏上機墓、宛かも董卓のぬきこまれ
く北斗の星一人多くの一概を山縣を謹厚の人とせんと笑み
べし

藤原製

神代ながら

深い縁しの日佛印

考古學的に立證する笹原氏



【東京電話】東亜共榮圏の一環たる日佛が歴史的に日本と深いつながりを有してゐる事は明かな事實として知られてゐる所今回佛領の驚記として佛印を主を踏査し考古學的學を遂げ最近帰朝した元京大講師東京市世田ケ谷區北澤三ノ八八二笹原助氏は

日佛印間の歴史的交渉は浮ア神代の昔にまで遡る佛印住民の生活様式は著しく日本人のそれと共通点を有つてをり殊に佛領印地方は古代から日本的勢力によつて支配されてゐた事が明瞭になつたとの結論を得た

佛印の一環であるべき事を決き出されてゐる、笹原氏は二日午後五時省で「印度の「感覚」の標に過つた

（古事記を繙いてみると神代に月讃命が「夜の國」に行かれた事が見えてゐる、夜の國とは日の入る國の事であつて大體遠江以南の地を指し太陽の浮ずる方角に日本から眺めを引いてみると印度方面にあたる、天照大神祭天の宮殿におかれになつた時には「夜の國」から來た二柱後長帝已」が鳴いた事が記されてをり又神武天皇の皇兄稲飯命御剣毛人野間皇二方が

夜の國へ

行かれてをり神代（紀元三千年）二度も我が國と夜の國との交渉があつたのであるから非常に密接な關係があつた事が想像される、佛印の土人の種族は「印度人種」で我國のものと著しく接近ありたものである又東南亞時代の遺物である銅鼓、銅鐸があつたがこれ等は日本の九州北部と安南地方にだけ發見されたものである

南部印度カンボチヤ人の祖先は「クメール」族であるが、私はそれが日本人祭たとの結論を得た、この「クメール」族は日本古代の「久米部」と相通ずるものがありはせぬかと考へられる、久米部は神武天皇御東征の際に於ける親衛隊であり勇武の誉れ高き民族であるが神武天皇所を見ると久米部はカンボチヤに移つたのではないかと想はれるのである、クメールは皇位の繼承に必ず剣を傳へるしクメール語といつて剣、兜を着け太鼓は日本流の神もあり、安南人の衣服は日本の奈良朝時代の服裝そのまゝでありカンボチヤ人は腰巻神の繼ぎ目には鉢巻をいたゞいてゐる、屋物も日本の駒下駄と同じで支那、朝鮮系のものでない

髪の毛は

眞黒で目は茶色男女共に顔を黒く染めてゐる、日本人のあぶらといふ批評はあたつてゐる、食物は米が主食で野菜、魚類を好み肉食を嫌ひ、祭の時には小豆飯をたいて祝ふ、住居も風立小屋で、屋根には干草、樫木をのせてゐる、百姓家も藁葺で百は日本流の引戸である、全く日本人の生活様式と合致してゐる、アンコール・ワットの寺は石以外には釘も木も使用せず、唯石を積み重ねて尖塔形に作り上げ日本古墳の石のたゝみ方と同じものであり、これは日本へ佛教の渡来する以前に渡来されたものであるが、おそらく日本の古墳發掘者が適したものではないかと想はれフランスの學者もこれ日本人の指導によるものではないかと言つてゐる、奈良朝時代における交渉を見ると安倍仲麿が遣唐使（安南總督）にあたるとなり今のハノイに城を築いてその地方を治めたがこのため日本民族的文化の黒潮が土民に移された、このことは近藤重藏の「安南誌」にも詳しくてなり仲麿の城跡は現在も同ハノイにある、相模太郎の御傳にあたらせられる高橋朝宗は慶長年間に入られ安南に渡られて支那に渡られついで佛印林の御家來佛可のラオスで歴されてゐるがこれは安倍仲麿の時代と符合する

戦國時代

海外貿易は盛に行はれ慶長年間の日本の勢力は強大なる時代であつた、この時の支那、朝鮮の貿易は鹿を鹿にしてゐる、その知きは千石船を造つて年々の貿易を行ひ年々の利潤は莫大なる金に上り千の金に上り年々の利潤を造營した大のである

の間方面はものすごいハイフオン、ユエ、ツイゴン、プノンペンの

日佛印

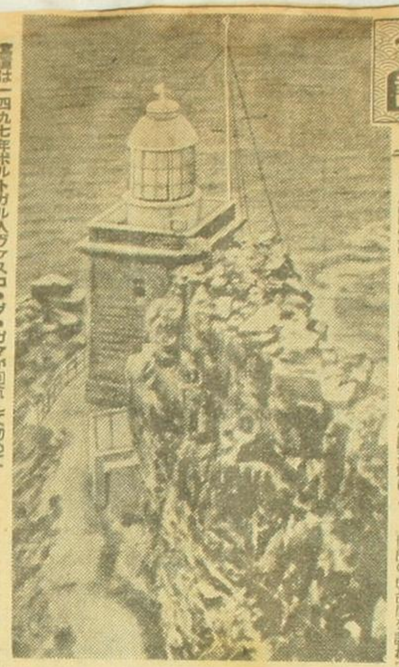
證する笹原氏

…佛印草創の一端を…
…ばかりの…
…ばかりの…
…ばかりの

海の道しるべ
燈台物語

（上）

古來「海を制した者は世界を制した」とするならば一國の制海權はその國の繁榮を測るバロメーターである。七つの海に雄さわぐ時、常にそこには海ある國の海を守り海なき國の海を求める生存の熱事かくり返されてゐる。世界の歴史は海とともにあつた。海國日本から海國日本まで、開國八十年の歴史には水軍に、海運に、漁業の富を包藏する海洋を目さして先驅者達によつて築られた進取、飛躍の魂が盡く新日本建設の礎となつて刻まれてゐる。海と鷗！　そのかげには燈台のあることを忘れてはならない。そしてその海の案内者は今や國土の最端にたつ國際防衛の尖兵として大使命の下、新しい一歩を踏み出したのだ。はじめて"海の記念日"が制定された意義深き今年、この夏へ飛躍の燈台巡禮を訪ねて燈台の話を綴ることとしよう。



寫眞は一四九七年ポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマが回航して初めてインド航路を開き東西兩洋を結んだアフリカ南端「喜望峰」の燈台

燈台の歴史は相當に古い。天平天皇の三年（紀元二三三四年）唐の求法僧鑑眞が東海、豊前に防人を置いて篝火を焚いたのをたまゝ〳〵承和六年（紀元二四九九年）遣唐使船が難破の目標にしたといひ、慶長十三年、時の豪商角倉了以が伏見港へ村民の目的吉三郎といふ者が燈臺を建てて航路の標識としたのが燈台の創めらしい。その頃は★

防人の烽火に濫觴
その名も燈明台
慶長生れ・船のガイド

との間に鎖國した江戸條約に基づき英人を招いて訓武の機械を輸入、今の剱ケ崎、觀音崎、野島崎、潮岬、鷹島など八ケ所に八基の燈台が建てられ、明治二年觀音崎が

★すべて燈明台と呼び寛永の頃になつてはじめて幕府でもこの燈明台の必要を認じ十二年今の凌州御前司燈台の所へ燈明台を建て、その後慶應三年にはその數全國で百五基にも達した。安政六年、國運開港により外船の往來が繁くなつたため慶應二年に英、佛、蘭、米

一番先に落成、これがわが國最初の燈台の元祖となつたわけである。

沿岸守る千七百基

この燈台建設のためには英國から土木技師のブラントンをはじめ相當の數人がやつて來たが、今の計畫になつたものでわが國の第一歩はこの燈台技師の

はこの燈台技師の心に感服し見るのも、がち偶然でない。

新前は一定燈臺者はた明治元年、國際木製の燈台の燈台となり、大正十四年遂々年（明治九年）明治九年甘日

入はされたが何しろ設備がつたため大部分は使ひ物にならなくなつて燈台を建てたもので、工事用もすれば燈臺、船橋、梁地、柔から電信、鐵道に至るまで

の防壁になつて燈台となり

に至つた。明治九年十月廿日くも燈臺設備明治九年明治

獨ソ兩軍作戰の新特色
戰車戰で獨に軍配
ソ聯　眞似損じた挾擊作戰

（ベルリン本社特電廿一日發）獨ソ戰は愈〻三ケ月余の經過によつて西部戰線と本質的に異なつてゐる點が見られる、ドイツの電撃作戰はこゝでも用ひられてかつてない成功を示し、またフランス戰を模範したと同じ手法によつてソ聯邦に開戰と同時に大打撃を與へた、これら西部戰線と共通するものがあるにはあるがその他に今までにない新しい特色があるのだ、

第一の特色

は戰史上最初の本格的戰車戰といふことだ、ドイツと同じくソ聯司令部も未來戰は地上部隊の大規模な機械化にあるといふことを知つてゐたので今次大戰勃發當時においてドイツとソ聯の戰車隊の機械化は他の諸國を遥かに超してゐた、獨ソ開戰の時にはソ聯の戰車は二万台に達したがソ聯は惜し氣もなくこれを使つた、そして開戰後五週間にして九千台が殲滅は戰史上最初の本格的戰車戰といふことだ、ドイツと同じくソ聯司令部も未來戰は地上部隊の大規模な機械化にあるといふことを知つてゐたので今次大戰勃發當時においてドイツとソ聯の戰車隊の機械化は他の諸國を遥かに超してゐた、獨ソ開戰の時にはソ聯の戰車は二万台に達したがソ聯は惜し氣もなくこれを使つた、そしてドイツの歩兵部隊は一台も戰車がなくともソ聯の戰車隊に對抗し得たそれは第一にドイツの對戰車砲が西部戰當時より著しく改造され増加してゐること、第二にソ聯戰車には引火し易いといふ缺點があることによる、またドイツの急射砲を無限軌道にのせたものはその威力と機動力によつてソ聯戰車をやつつけるのに非常に役立つた、ドイツ歩兵部隊は西部戰當時の市七ミリ對戰車砲に加ふるにソ聯の一番厚い裝甲の戰車をも貫き得る對戰車砲を待つてゐる、この對戰車砲はソ聯側自慢の戰車の六ミリ裝甲も貫き得たと報ぜられてゐる

西部戰當時の系備戰車と違つてソ聯戰車、殊に小型のものは威力が弱く搭載武器も比較的劣れてゐるが、裝甲の點ではドイツの戰車ではない、況んや急降下爆撃機が來たらなんとも仕方がない、ソ聯戰車はしばらく五百台もかたまつて國道を行くが戰線に着く前に急降下爆撃機の餌食となつた、重戰車でさへ急降下爆撃機には文字通り粉碎されてしまつた

第二の特色

としてはソ聯司令部の戰術が獨逸のそれと同じだといふことである、ソ聯軍は獨軍の戰略作戰を學んでゐる、この戰術の中心は攻撃は防禦に勝るといふところにあるのだ、スターリン線は主として河川、湖沼を利用した自然の要塞であつてマジノ線とは比較にならない、ソ聯軍は佛軍のやうに要塞線の後方でドイツ軍の攻撃を待つのではなく廣野で戰ひを挑んで來た、裝甲七個師團、機械化大個師團を含む總數卅七個師團のソ聯最長の戰線はビヤリストックとミンスクの戰爭であるひは獨軍ソ聯司令部はドイツの機械作戰をよく研究してゐてドイツ軍に挾まれたときは同じやり方でこれに對抗しようとした

西部戰では例軍は敵軍に挾まれると屈伏したがソ軍は挾まれると逆に挾み返さうとして、いづれがいづれを挾撃してゐるのか分らぬやうな複雜な局面を呈したことがあつた、たゞ結局はドイツの勝れた戰術が勝利を制したのである

ドイツの歩兵部隊は一台も戰車がなくともソ聯の戰車隊に對抗し得たそれは第一にドイツの對戰車砲が西部戰當時より著しく改造され増加してゐること、第二にソ聯戰車には引火し易いといふ缺點があることによる、またドイツの急射砲を無限軌道にのせたものはその威力と機動力によつてソ聯戰車をやつつけるのに非常に役立つた、ドイツ歩兵部隊は西部戰當時の市七ミリ對戰車砲に加ふるにソ聯の一番厚い裝甲の戰車をも貫き得る對戰車砲を待つてゐる、この對戰車砲はソ聯側自慢の戰車の六ミリ裝甲も貫き得たと報ぜられてゐる

西部戰當時の系備戰車と違つてソ聯戰車、殊に小型のものは威力が弱く搭載武器も比較的劣れてゐるが、裝甲の點ではドイツの戰車ではない、況んや急降下爆撃機が來たらなんとも仕方がない、ソ聯戰車はしばらく五百台もかたまつて國道を行くが戰線に着く前に急降下爆撃機の餌食となつた、重戰車でさへ急降下爆撃機には文字通り粉碎されてしまつた

第二の特色

としてはソ聯司令部の戰術が獨逸のそれと同じだといふことである、ソ聯軍は獨軍の戰略作戰を學んでゐる、この戰術の中心は攻撃は防禦に勝るといふところにあるのだ、スターリン線は主として河川、湖沼を利用した自然の要塞であつてマジノ線とは比較にならない、ソ聯軍は佛軍のやうに要塞線の後方でドイツ軍の攻撃を待つのではなく廣野で戰ひを挑んで來た、裝甲七個師團、機械化大個師團を含む總數卅七個師團のソ聯最長の戰線はビヤリストックとミンスクの戰爭であるひは獨軍ソ聯司令部はドイツの機械作戰をよく研究してゐてドイツ軍に挾まれたときは同じやり方でこれに對抗しようとした

西部戰では例軍は敵軍に挾まれると屈伏したがソ軍は挾まれると逆に挾み返さうとして、いづれがいづれを挾撃してゐるのか分らぬやうな複雜な局面を呈したことがあつた、たゞ結局はドイツの勝れた戰術が勝利を制したのである、理論上はソ軍は勝利は機先を制して撃つにあるといふことを十分知つてゐたが實際には開戰早々から機先を制せられて防禦に立たざるを得なかつたのだ

第三の特色

はソ聯の人命無視にあるといはれる、こんなに人命が粗末にされた戰爭といふのはいまだにビヤリストック、ミンスクの大包囲戰とヴィテブスク、スモレンスク、南部ウクライナ、ヤエフ西方及び南西方での包囲戰のように人命が失はれたか想像も及ばない、二部は開戰後五週間で赤軍の死傷者は

に上つたと計算してゐる

赤軍は絶望に陥ちさせ、ゲリラ戰をやつた、ソ聯兵はドイツの最初の攻撃の大波が通り過ぎるまで隠れてゐてその後から傳令や後續部隊を襲撃した、そこで獨軍の方も城と手榴彈を手に村から村を焼つぶしに戰爭せざるを得なかつた、ソ聯の指揮官が人命を全く無視してゐるのは西部戰線でフランスの指揮官がその戰線の人命を出来るだけ助けようとしたのと著しい對比をなしてゐる

第四の特色

はソ聯兵はどうして戰爭するのが嫌にといふ疑強だ、西部戰線の時と違つてソ聯千代線戰線所になつても降参しうとしない、ドイツはその原因を第一にボリシェヴィズムに求めてゐる、第二に赤軍兵士は一般的

防人の烽火に濫觴
その名も燈明台
慶長生れ・船のガイド

の燈台

燈台の歴史は相当に古い。天平天皇の三年（紀元一三三四年）唐の求法僧に聞いて京都、春日殿、制服に防人を置いて烽火をあげさせたのをたまゝ〳〵承和六年（紀元一四九九年）霊鷲僧侶が聞いて目撃したといひ、慶長十二年、防人関白秀吉の間に底絶した江戸幕府に基づき英人を招いて新式の燈台を輸入、今の剣ケ崎、観音崎、野島崎、潮岬、帰帆なる八ケ所に八基の燈台が建てられ、明治二年鎖国令が解かれ、外人の生活を基調にして築工したのが燈明台の始まりとなり、大正十四年遠信省の燈明台局が置かれ爾来年には燈台局となり現在の燈明台局の位置に至つた。明治九年七月廿日に燈明台局が置かれ爾来年には燈明

ソ聯歐露を失はゞ

経済的に存立するか

ウラル政權

獨逸のスターリン帝の建設に従事してから、既に注目の的となつてゐる地方で、スクワ政權の移轉機関が置かれ、ソ聯がこのドンバスとしてもつともその力を注いだ地域である、ウラルは帝政時代から鑛物の産地として知られ、鉄鑛は良質で、その埋蔵量十億トン、ソ聯全土の埋蔵量の四分の一を占め、またその附近には銅、クローム、ウオルフラム、銅、また化學原料である加里、岩鹽、硫黄、クローム鑛を産出し、プラチナ、宝石、アスベスト、ニッケル、ボーキサイト等の産地としても有名である、石炭も産出するがこれは余り豊山出ないので、クズネツ炭田（地質學的五百五十億トン、同ソ聯の上部を占める）と結びつけ、この如く有機的である

▼…大体以上のやうにウラル地方は黒色冶金企業、有色冶金企業、化學工業及び機械製造業の設備には相當なる成績を挙げてをり、石油の如きも最近有望なる油田を発見したと称されてゐるが、ソ聯としては將來最も有望なる工業地帯であるとしてもまだ直接の軍需工業即ち武器の製造には當つてゐない、また食糧方面において自給自足さへ困難な地域であることが重大缺点である

武器についていへば、極東赤軍の武器補給は依然レニングラードおよびモスクワからの供給に待つもので、ウラル地方はこの点何等の役割も演じてゐず、食糧方面においても西部シベリアのオムスク、ノヴオシビリスク方面はコルホーズ制度の下に豊年穀物生産に見るべき成績を示してゐるが、それでさへ食糧の自給自足を急きつゝある極東ソ聯へさへ供給する余剰をもつてゐない有様であるから、ウラル政權の経済的基礎はすこぶる偏在してゐて、大人口を包擁する準備も設備もなく、直に食糧補給難に悩む條件下に置かれてゐる、また抗戰力において、欧聯の武器製造所が壊へられる以上は、いはゆる續内戰當時の如きゲルチザン戰的抵抗は出來ても、欧聯を喪つて、他國からの武器、軍需の供給を受けずしては、赤軍を保持することも出來ないであらう

▼…この意味からウラル政權の孤立は困難であるが、ヴオルガ沿岸一帯の食糧供給を確保し武器の供給を欧外に仰ぎ、西部シベリアのノヴオシビリスク方面に根據を置いて、極東ソ聞とヴオルガの線を可能とするならば、近代的國家としてではなくモスクワ政權の寄生としてその存續は一概に不可能視されない

有様である

機械技術によつてもスクワ政權の移轉機關備が設けられ、ソ聯政府機関つともその力を注いだ地域である、ウラルは帝政時代から鑛物の産地として知られ、鉄鑛は良質で、その埋蔵量十億トン、ソ聯全土の埋蔵量の四分の一を占め、またその附近には銅、クローム、ウオルフラム、銅、また化學原料である加里、岩鹽、硫黄、クローム鑛を産出し、プラチナ、宝石、アスベスト、ニッケル、ボーキサイト等の産地としても有名である、石炭も産出するがこれは余り豊山出ないので、クズネツ炭田（地質學的五百五十億トン、同ソ聯の上部を占める）と結びつけ、この如

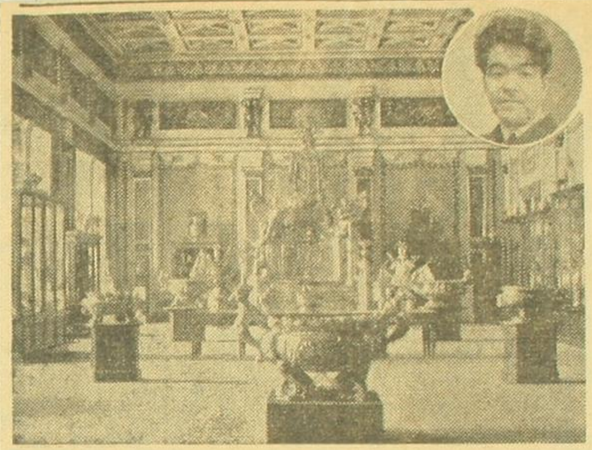
電力等の産業を加へて面積六百万平方キロを占める大綜合企業地帯を形成したのである

この企業地帯の中心がスウエルドルフスクであつて、鉄鉄鋼の生産の外、機械製品、製材、製紙、電力生産を行つてをり、化學機械製作工場、電機製作綜合企業、高級冶金工場、電解工場、銅化學工場等がある、チエリヤビンスクもこの綜合企業地帯に包含されるもので、こゝにはマグニトゴルスク（鉄鑛埋蔵量四億五千万トン）を中心にマグニトゴルスク綜合企業があり、鉄鑛年産三百二十万トンを上げ、その他鋼、ニッケル、亜鉛、アルミニューム等の工場がありチエリヤビンスク・トラクター工場も最新式のものとして

赤色文化の異彩

豪奢な美術館

民族の統一に利用



【写真は正に歴史にさらされんとするレニングラードのエレミタージュ美術館内銀器の部屋、円内は評論家矢代幸雄博士】

赤色革命後のソ聯は豫想外に美術を尊重した、古いものを掠奪するソ聯社會政策も手傳つて夜叉した個人の財産の中の美術品を買り出した聯があつたが

事實は反對で文化的に價値あるものを非常に尊重した、

また美術館もレニングラードに世界一ともいふべきエレミタージュ美術館（元王宮）を開設、その藏品が十二萬にもおよぶものである

私はその藏品の一部を借して開いてゐるところでレムブラントの傑作が十八枚も一室に展觀されてあるのを見た、本國オランダでも見られぬことである、モスクワでも當時八十余の美術館が開かれた、また革命前の個人の蒐集品は國有とはしたが、その所有者の家をそのまゝ美術館とし、元の所有者には勞働服と

走する赤軍を迫つて進んだ紅軍は到る處にソ聯の「煽動、宣傳の美術」を眺めた、そしてまた明日知れぬレニングラードに、モスクワに、豫想外に多い古美術品と美術館がいきや破壊と毀壊の危機に曝されてゐる——

矢代幸雄博士は「革命とソ聯美術」を語る

美術品研究のため二度ソ聯に派した美術品研究所長矢代幸雄博士に「革命とソ聯美術」を語る

給料を出してその個人や所有者をしたのだから美術館は別

そして蒐集されてゐた作品もいろいろのものが多かつた、殊にシューキン氏らのフランス美術の蒐集はアメリカのバー氏の蒐集に比すべきものであつて、ルノワール、セザンヌ、マチスらの最大傑作が數多くあつめられてゐた、民衆は美術に強い関心を持つてゐたかは別として政府が文化教育機関としてこの美術館を

極度に利用

し、指導者に引率された勞働者が列をなして美術館を訪はしてゐたのはモスクワで見た最大の事実であつた、民衆教育機関として美術館を盛んに利用したソ聯は、必然的にスラブ民族に力を入れた、民族性を強くソ聯が美術に限つては革命前から國家主義、民族主義の傾向を示してゐるのは示唆する所深いものがあ

自給である

▼…大体以上のやうにウラル地方は鉱山冶金工業、有色冶金企業、化学工業及び機械製造業の設備には相當なる成績を挙げてをり、石油の知きも最近有望なる油田を発見したと称されてゐるが、ソ聯としては將來最も有望なる工業地帯であるとしてもまだ直接の軍需工業即ち武器の製造には當つてゐない、また食糧方面において自給自足さへ困難な地域であることが重大缺点である

武器についていへば、強固な赤軍の武器補給は依然レニングラード及びモスクワからの供給に待つもので、ウラル地方はこの点同様の役割を演じてゐず、食糧方面においても西部シベリアのオムスク、ノヴォシビリスク方面はコルホーズ制度の下に著年穀物生産に見るべき成績を示してゐるが、それでさへ食糧の自給自足を脅きつゝある極東ソ領へさへ供給する余剰をもつてゐない有様であるから、ウラル政權の経済的基礎はすこぶる僅在してゐて、大人口を包擁する潜備も設備もなく、直に食糧補給難に悩む條件下に置かれてゐる、また抗戰力においても、欧洲の武器製造所が配へられる以上は、いはゆる内戰當時の知きバルチザン的抵抗は出來ても、欧洲を控つて、他國からの武器、軍需の供給を絶ゲしては、赤軍を保持することも出來ないであらう

▼…この意味からウラル政權の孤立は致命であるが、ヴォルガ沿岸一帯の食糧供給地を確保し武器の供給を國外に仰ぎ、西部シベリアのノヴォシビリスク邊に根據を置いて、極東ソ領とヴォルガの線を切断するならば、近代的國家としてではなくモスクワ政權の殘骸としてその存續は一部に不可能視されない

異色文化の異彩
豪奢な美術館
民族の統一に利用

美術品を集めたのは三月ソ聯に旅した美術研究所長矢代幸雄博士に「聖像とソ聯美術」を聞く

【写眞は正に戰爭にさらされんとするレニングラードのエレミタージュ美術館内銅像の部屋、円内は語る矢代幸雄博士】

また美術館もレニングラードに世界一ともいふべきエレミタージュ美術館（の元王宮）を開設、その館數が十二館にも及ぶものである私はその寶庫の一部を置して開いてゐるところでレムブラントの傑作が十人枚も一室に陳列されてあるのを見た、本國オランダでも見られぬことである、モスクワでも宮殿八十余の美術館が開かれた、また革命前の個人の蒐集品は續々とはしたが、その所有者の掌をそのまゝ美術館の所有者に提供するとしたが、元の所有者には勞働服と

給料を出してその個展や寫眞等としたのだから美術館は蔵出した

そして陳列されてゐた作品もいゝものが多かつた、殊にジューキン氏らのフランス美術の蒐集はアメリカのバー氏の蒐集に比すべきもので、ルノワール、セザンヌ、マチスらの最大傑作が數多くあつめられてゐた、民衆は美術に對しどう考へてゐたかは別として政府が文化教育機関としてこの美術館を

極度に利用

し、指導者に引率された勞働者が列をなして美術館を訪はしてゐたのはモスクワで見た風景であつた、民衆教育機関として美術館を盛んに利用したソ聯は、必然的にスラヴ藝術に力を入れた、國際性を説くソ聯が美術に限つては革命直後から國粋主義、民族主義の傾向を示してゐるのは示唆する所深いものがあ

る

スラヴの傳統を誇るビザンチン以來の宗教畫を集め驚くべき設備でその破損を修理し、またスキタイ藝術の遺品は陽光の入らぬ室に部屋に保存してをり、白色環燈下に眺めた金色燦爛たるこれらの作品の前に私も眼を奪はれた

またロシア近代作家の作品を集めたトレチャコフスカヤ、ガレリヤなどには有名なレピンやウエレスチャキー、アイバゾフスキーなどの作がロシア作家の優秀さを誇示し、それを參觀に來た民衆は感歎で驚嘆を聞かされ、スラヴ民族の傳統の偉説性を教へられてゐたのである

しかも政府は

スラヴ藝術

の研究、保護を慎重に考慮し、スキタイ、中亜、シベリアに殖民し、スキタイ、檢察や発掘隊が派遣せられ、欧

聖よりシベリア鉄道方面の中、小都市には外國人非公開の美術館が設けられ、発掘品は陳列、保存せられ驚くべき考古學的、民族學的研究がすゝめられてゐたことを唯一人の外人國家をするルモニー氏（獨人）が発表したその民族主義的発掘、特に地方大衆の民族的目覚、統一に與へた影響は少くないであらう、そして現代作家については聖像と宗教畫の手腕として陳列されてゐたが、しかし何といつても數多の民族傳物館に收められたビザンチン以來のスラヴ藝術作品、世界に誇るウクライナ、小ロシア、ウラル、コ

ーカサスの

民藝の奨勵

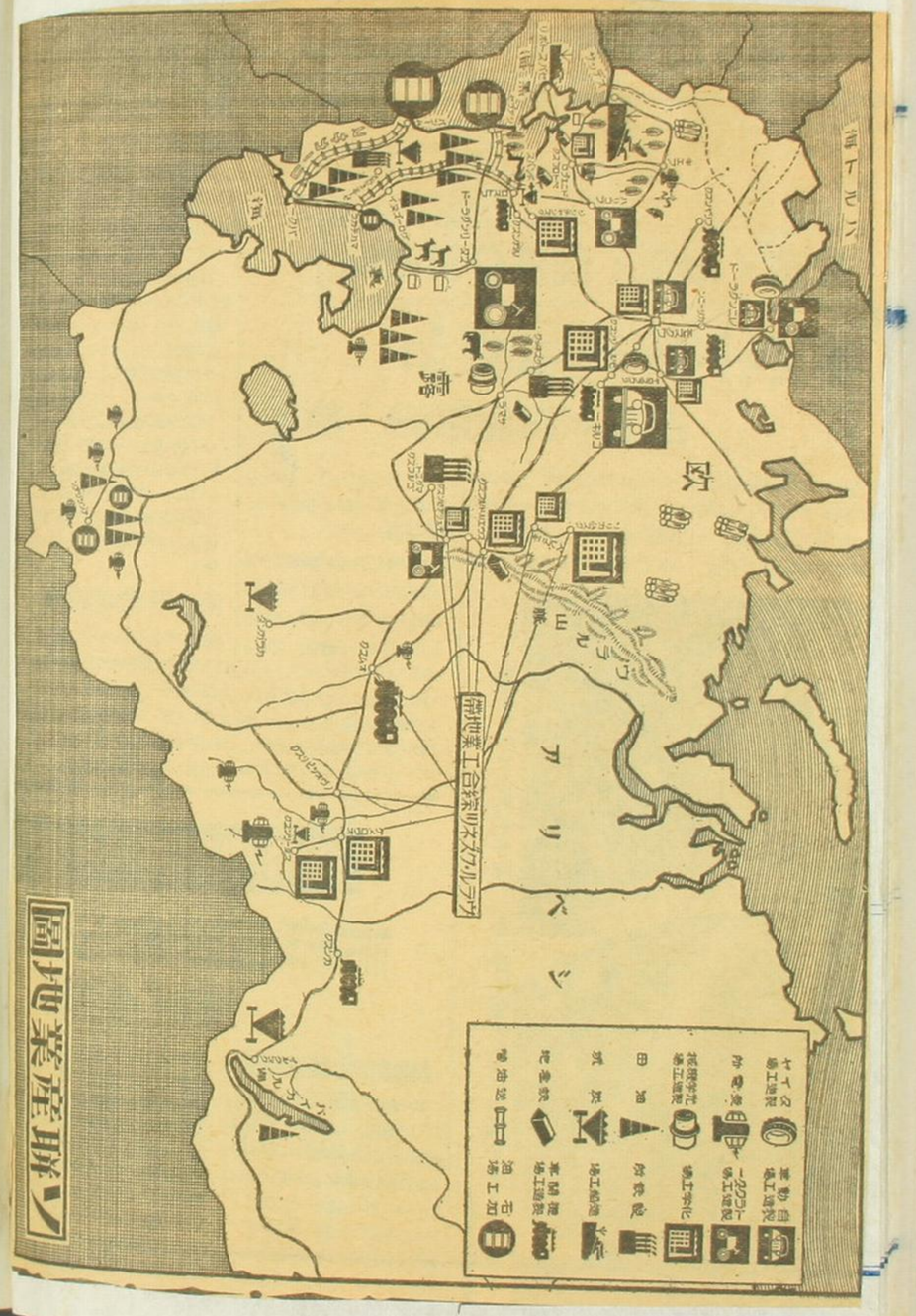
なとすべて美術はコミンテルンの眞意性とは別に地方性、民族性を強調し、革命直後より民族統一の方向に向けられてゐたことは注目に値したものである

忽然"海岸に螢石の街"
敵兵も銃棄てゝ採掘

【石浦にて川崎特派員発】今春旅東上陸作戰によつて皇軍小林部隊の部隊に確保された浙江省石浦鬼北二十キロ五鄧山の螢石はその後數次にわたる陸工省、鉱中鑛業などの實地調査を経て驚嘆外に良質かつ豊富な鉱脈を有すること判明いよ〳〵近く鉱中鑛業の手によつ

て採掘に着手し前時下期待産業の若用をはかることになつた

螢石は鉄ならびにアルミニウム製の精錬剤として欧米にあるべからざるもので五鄧山のごとき良質螢石はとくにアルミニウム製造用に適し可採鑛量三十万トン、實際は六十万トン以上もあるといはれてをり山腹に幅平均二ないし三メートル、最も厚いところでは十二メートルに達し東洋第一の大鑛脈と折紙をつけられたもとく五鄧山は日露北田洋行が昭和三年頃から鑛業分譲の申請まで中止人に採掘させてゐたが鑛業で中止となつてゐたもので鑛業ス


ソ聯産業世界圖
アフリカ
ヨーロッパ
ウラル
ドニエプル
ドン
ボルガ
ヴォルガ
ヴェルヒニエ
ヴェルヒニエ
ヴェルヒニエ

私の見た歐洲大戰

下

英上陸・いつでも敢行

歐洲共榮圈 出來たも同然

本社前歐洲特派員 大原武夫

ソ政府結局泣寢入り

モスクワで聞くとスターリン首相の肚はシベリヤの中央ノヴオ・シビリスクあたりへ逃げ込んで長期抵抗に入るのだといふことだが、ドイツはそんなものは放つて置くといつてゐる。

逃げた敵府、武器を捨てゝ逃げた赤軍の再起部隊、そんなものは物の數ではない。長期抵抗を叫ぶなら叫べ、實力も何もありはしない、やがて泣寢入りとなるであらう、とドイツでは考へてゐる。一年たつたらシベリヤ鐵道も開通するだらうとあるドイツ人はいつてゐた。野蛮國といふか、呑ん氣といふか。しかし、とにかく、今までのドイツの豫想はみな當つてゐるから仕方がない。ポーランド戰でも、バルカン戰でも、みな豫言の通り、一つは二週間、一つは一ケ月以内にピタッピタッと進行して終つてゐる。ソ聯戰もおそらくドイツの作戰計畫どほりに進行し終了すると考へるのが當嚴のやうである。

獨の兵力・余裕綽々

さうすると、ドイツにとつてあと殘る大きな問題は英島國である。これは何れ攻略にかゝらねばならぬ。米國がすぐ自と戰の先きのアイスランドまで進出してきた。放つて置くわけに行かぬだらう。ソ聯との戰爭最中に、いやそれをしほに米國が進出してきたのだ。ドイツはいはゆる二正面作戰ことは何でもない。對ソ戰をはじめたから英國攻略は無期延期だなどと考へるのは、とんでもない認識不足である。

英國への上陸作戰は何でもない。今やあらゆる準備が完了してゐる。やれば、いつでもできる。たゞ今すぐやれば相當の犧牲が出る、來月やれば少い犧牲ですむ。來々月やればさらに犧牲がすくない。もう一冬越せば英國は上陸戰を要せずして降つてしまふかも知れない、といつたやうな見方が正しいやうである。

米の遠吠痛くなし

潜水艦と飛行機で、毎月百万トンに達くない船がしづんでゆく、英國はこれだけで、もはやフラ〳〵狀態に陷つてゐる。敵兵とまではいかないにしても、相當ひどい狀態に落ちてゐる。米國からのカンフル注射は、非常に長い針が要るので、今のところ聽きにくいといふ有樣である。たゞし米戰のアイスランド進駐はいろ〳〵の意味で目ざはりである。ドイツは放つて置けないとして、この夏あたり上陸戰をはじめるかも知れない、やるなら夏から初秋にかけてが最もいゝ時機のやうである。

この上陸完了をもつて、ドイツの歐大陸戰線は完璧である。歐洲大陸は新しい文明に向つて建設の歩みを進めるわけである。

米國が歐洲大陸に向つて事實上の戰爭狀態にあるが、そんなことは放つて置けばいゝ、戰爭狀態だといつて、そんなことは名ばかりである。どつちも出て行つて相手をなぐるわけにはいかぬ。大西洋の對岸でわい〳〵口やかましく騒ぐらゐのことは放つて置けばいい。自給自足の歐洲大陸は、米國以上の生産文明を築くべく着々として繁榮すればいゝのだ、とかうドイツでは考へてゐる。

歐洲がかうい、風に片づく前にはスエズ攻略も必要であり、かくて英帝國は崩つた崩のやうにばら〳〵になる。英米の海戰は世界七つの海にわたつてドイツの通商を妨害する。勿論ドイツは英島國

藤原製

英上陸・いつでも敢行

歐洲共榮圏　出來たも同然

本社前歐洲特派員　大原武夫

でもあり、手古摺るだらう、と考へる人もあるぶんある。しかし、ドイツにゐて、私たちの見たところは全くそれと違ふ。英國へは、ドイツ戰はいつでも上陸できる。ソ聯との戰爭をやりながらでもできる。高が五、六十万の兵隊でやれる仕事である。始めさへすれば十日で片づくといつてゐる。

ドイツには今一千万余の動員兵力がある。大きく見積つてソ聯で三百万を使ふとしても、なほ七百万矢張り狀態にある。この中から英國攻略に五、六十万割くくらゐのことは何でもない。ソ戰をはじめたから英國攻略は無期延期だなどと考へるのは、とんでもない誤算不足である。

英國への上陸作戰は何でもない。今やあらゆる準備が完了してゐる。やれば、いつでもできる。たゞ今すぐやれば相當の犠牲が出る、來月やれば少い犠牲ですむ。來々月やればさらに犠牲がすくない。もう一冬越せば英國は上陸戰を要せずして參つてしまふかも知れない、といつたやうな見方が正しいやうである。

米の遠吠痛くなし

潜水艦と飛行機で、毎月百万トンに達くない船が沈んでゆく、英國はこれだけで、もはやフラ〳〵狀態に陷つてゐる。瀕死とまでは行かないにしても、相當ひどい狀態に落ちてゐる。米國からのカンフル注射は、非常に長い針が要るので、今のところ効きにくいといふ有様である。たゞし米戰のアイスランド進駐はいろ〳〵の意味で目さはりである。ドイツは放つて置けないとして、この夏あたり上陸戰をはじめるかも知れない、やるなら夏から初秋にかけてが最もいゝ時機のやうである。

この上陸完了をもつて、ドイツの歐大陸制覇は完璧である。歐洲は大陸は新しい文明に向つて確実の歩みを進めるわけである。

米國が歐洲大陸に向つて事實上の戰爭狀態にあるが、そんなことは放つて置けばいゝ、戰爭狀態だといつて、そんなことは名ばかりである。どつちも出て行つて相手をなぐるわけにはいかぬ。大西洋の海岸でわい〳〵ロやかましく騒ぐらゐのことは放つて置けばよい。自給自足の歐洲大陸は、米國以上の生産文明を築くべく着々として經營すればいゝのだ、とかうドイツでは考へてゐる。

歐洲がかうゝと固まるに片づく前にはスエズ攻略も必要であり、かくて英帝國は屬つた國のやうにばら〳〵になる。英米の海軍は世界七つの海にわたつてドイツの通商を妨害する。然るにドイツは英帝國攻略後は、英國の全ドックに手入れして、ドイツ海軍の再建に全力を挙げ、必要な場面から英米海軍の海賊行爲を一掃し得る力を築きあげるだらう。

鐵壁の獨國內秩序

十年もすれば、ドイツの海軍は米國のそれと十分匹敵できるものになり得るだらう。しかし、今の時勢に十年さきの見通しは無用である。今はたゞ歐洲においてはドイツは絶對であること、ヒットラー總統の一統下の歐洲大共榮圏はすでに出來上つたも同然であること、この二つを明瞭に認識するだけで十分である。

國民と遊つた方向への論議は、ドイツでは全く聞かれない、無責任な論議が國外へ洩れたりするのは、全體主義的國防國家にはあり得べからざることである。

ドイツは二千万余の全戰力が機械化兵を戰位として、その上に組立てられた作戰は全然今までのものから飛躍してゐる。七千万餘の人口から一千余万を動員してゐる。これを賄ふためには全國の全産業が國防體制に高度に整備されてゐる。國民の生活もその中の一環である。全國のあらゆるものが、國防に向つてのみ動員されるのでなければ、あれだけの戰果が、あれだけの國運の躍進ができるものではない。

取引が全然ないといふ國にはいかぬが、極刑は死刑だから極めて少い例外としてのみある。戰地では厳警警戒は厳重だから千軍は厳正である。法は作らざるに知くはないが、作つた以上は、厳正に守らなければならない。法のよく守られてゐること、ドイツは民主々義國の比ではない。

日本に望む擧國體制

戰時利得はみな國家が巻き上げてゐる。だから軍需景氣といふものはない。強ひて探せば勞働者のみいりが、いくらか多くなつた程度である。國民の消費生活は極度に制限されて、實際苦しい生活である。しかし貯蔵は多く、軍需内の生活は豊富である。飛行機、武器、彈藥などの生産はむしろあり余つてゐる。だから樂業報國である。

日本人は今考へてゐる以上にドイツを強い國と見なければならぬ。それと同時に翻つて、日本の軍も産業も國民生活もみな機械化し、科學化し、合理化しなければならない。國の全體を挙げて一つの國防體形に築きあげねばならない。でなければ次の戰爭には間に合はないだらう。微妙な日本問題の國際關係は今暫るべきでない。しかし、次の時代は身近かに迫つてわれ〳〵の新生を促してゐるのは明かである

（完）